
お嫁にいきますっ！！

六原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嫁にいきますっ！！

【Nコード】

N2318P

【作者名】

六原

【あらすじ】

大崎 梨乃は、異世界生活二年目の元高校生。悪の魔王を倒し世界を救って大団円！！と思いきや、そんな出来事は序章に過ぎなかった。魔術師の（色々と手厚い）加護のもと、平凡でも幸せな人生を送る筈だったのに、毎度おなじみのように現れる乱入者によって、梨乃の毎日はかき回されてゆく。重い話は軽やかにスルーの異世界ラブコメディ。

登場人物・用語辞典（前書き）

『お嫁にいきますっ!!』の登場人物紹介と用語辞典です。

登場人物・用語辞典

登場人物紹介

* * * * *

大崎 梨乃

18歳。本編の主人公。二年前に異世界へとやって来た元高校生。

世界救済の旅と後宮生活を経て、ラグナと結ばれる。
体力が取柄、料理は苦手。いじられ体質。ややおつむが残念なところも。

容姿 黒髪・黒目の十人並み。

* * * * *

ラグナ・ラグリーズ

26歳。梨乃の婚約者兼保護者。

世界救済の旅の仲間であつた元宮廷魔術師。本編中では最強の予感。

ところ構わず卑猥な台詞を吐く、爽やかな変態。梨乃を溺愛している。

容姿 銀髪・深い青の瞳。美形（梨乃曰く）

* * * * *

ギアン・ウル・ファルス

20歳。聖国ファルスの王子様。

典型的な遊び人。スケコマシ。梨乃曰く、歩く種馬。ヘタレのボンボン。

必殺技は『君だけだ攻撃』。

容姿 金髪・碧眼。まんま王子様。

* * * *

ベルゼブ

18歳（身体年齢）。封印されたはずの魔王。

自身の復活を望んでおり、梨乃を闇におとすべく付き纏う。

以前は恐ろしい魔王だったが、今では何故か馬鹿魔王。そして犬。

容姿 黒髪・黒目・褐色の肌。

* * * *

アルバート・ラグリーズ

ラグナの養父にして師匠。

ワラワヘムを統括する大魔術師。本来なら偉い人。

チョビヒゲがポイントの素敵なオジサマ。ラグ曰く、変態オジサン。

* * * *

マリベル・ラグリーズ

ラグナの養母。アルバートとはラブラブ夫婦。
物腰の柔らかな女性で、梨乃とラグナの婚約を喜んでいる。

用語辞典

大賢者リユーカーン……ワラワヘムを造った大賢者。一人の女性
の為に塔を造り上げた男気溢れる人（梨乃談）

虚無の世界……この異世界の果てにあるとされる場所。人間では
到達できない。

ピレッツァ……異世界のパン。フランスパンに似ている。

ワラワヘム……魔術師協会の総本山。名の知れ渡る場所で、魔術
師にとっては『聖域』、その他の者達からは『魔窟』として恐れら
れている。地名ではない。

第1話 はじまりは朝チュン！？

開けっ放しの窓から流れる風が、ふわり、とカーテンを靡かせる。差し込む光がゆらゆらと、瞼の向こうで揺れていて、私は薄らと目を開く。

遠くから、小鳥の囀りが聞こえる。柔らかな風は、しつとりと汗ばんだ私の肌を撫で、身体の火照りを心地よく冷やしてゆく。

清々しい、そう言うに相応しい朝だった。

もう少し、このまどろみを楽しんでいたい。

私は情眠を貪る為、もう一度目を閉じる。ああ、何という至福の一時。このままずっと、時が止まればいいのに――。

コロン、と寝返りを打つ。

すると、鼻先に壁があった。

規則正しく上下するその壁は、人肌に似た温度で、落ち着く香りがした。

暖かくて、気持ちいい。

私は手を伸ばして、そつと触れてみる。指先で、なぞる様に優しく。

ピク、と反応する壁。大きく動いて、長い腕の中に、私の身体を引き寄せる。

——ん、腕の中？

ぱちり。

私は思い切り瞳を開いた。頭が急激に覚醒してゆく。
絡め取られて、不自由な身体。だから、頭だけを動かして、その腕の主を見る。やたらと整った顔で、すやすやと眠っている一人の男を。

「おおう?!」

私の口から漏れたのは、間拔けな声。

それからぐるりと視界だけを巡らせて、ようやく彼に抱きしめられている事実が気が付く。

衣服越しでも分かる肌の温度。私の顔が、とんでもない勢いで熱く茹ってゆく。

——いやいや、待て。落ち着け私。

グルグルと、頭の中で言葉が駆け巡る。

男と女。一つのベッド。そして言い訳無用なこの体勢。

記憶を手繰り寄せれば、思い出すのも恥ずかしい、昨晚の痴態に辿り付く。

焦らされ、弄ばれ、彼の腕に縋りついた自分の姿に。

——やつちやった……!?

そうして私は、およそ清々しい朝には似合わない、羞恥の悲鳴を上げる破目となった。

第2話 朝の睦言

耳を劈くような悲鳴を間近で聞いたはずなのに、彼はケロっとした表情で一瞬私を見つめると、脳髓まで蕩けそうなほどの極上スマイルを浮かべた。

「おはようございます、梨乃。いい朝ですね」

「あ、おはよう——って、違う!!」

つい彼に釣られて、私も挨拶を交わしてしまう。

いけない、いけない。こうやっていつもそのペースに引きずり込まれるんだから。

私は気を取り直し、彼に向けて剣呑な視線を送る。

「この手を早くどかして。ちょ、ちょっと、変なところ触らないでよ……!!」

「何故？もう少しこのままでいいじゃないですか」

ギュ、と引き寄せられて、隙間が無いほど密着する。

耳元に甘く息を吹きかけられれば、否応なしに身体と心が反応した。

「あ、ダメ……」

——って、これも違う!!

イヤイヤと首を振って、彼の胸を遠ざけようと押し返す。

「タイムを要求します。話し合いをしよう」

「何の話し合いです？明るい家族計画でも立てますか？」

「違うつー!!」

あまりにもジタバタと動くものだから、彼も観念して私を解放した。

その拍子に、反動に逆らえない私の身体はゴロゴロと転がり、ベッドから落ちてしまう。

「あいたたた……」

思い切り腰を床に打ち付けてしまった。

清々しい朝だというのに、なんだってこんな痛みを味わわなければならぬのか。

情けない声を上げて蹲る。そこへいつの間にか近付いてきた彼の腕が伸びて、ひよい、と持ち上げられた。私はあつという間に彼の膝の上。ベッドに腰掛けた彼は、後ろから私の身体を抱きすくめ、首筋に唇を寄せた。

「朝から元気ですね、貴女は。昨夜あんなに鳴かせたのに、もう回復しているなんて……」

「な、鳴かせたとか言わないでよ!! ていうか、首のところで喋るなっー!!」

「じゃあ、耳で」

耳朶を甘噛みされて、嬲られる。

ぞわ、と肌が粟立って、身体の芯がくた、と溶けた。

「ちょ、待って……耳、は、ダメ……」

「首も駄目、耳も駄目……なら他のところを触るしかありませんね」
「そうじゃ、な……あつ」

大きな手が、腰の上を滑る。

鈍かった痛みが消えて、もっと別の、ぞくりとする感覚が私を襲

う。

抗議の声を上げようと口を開くと、顎を？まれ、彼の唇で言葉を塞がれる。

始めは優しく啄ばむように。それから下の唇をやんわりと噛まれ、歯列を舌でなぞられる。

——あ、ダメ。気持ち良いかも。

舌が絡み合う。息も出来ないくらい。

頭がぼうつとして、何も考えられない。

見えるのは、熱に浮かされたような、彼の蒼い瞳だけ。

「そんな顔をされたら、止まらなくなりますよ？」

いいんですか？

彼が訊ねる声に、私は何も答えることができなかった。

思わず、本当に思わず絆され、頷こうとして——。

「……なんて、朝からそんな元気あるわけ無いでしょう。体力だけが取柄の貴女とは、違いますからね」

そう言っ て笑う彼に、私は不覚にも間抜けな面を晒す事となった。

第3話 こんな序章なわけですが

突然ですが。

私こと、大崎 梨乃は、只今異世界生活二年目の、元高校生です。

——なんて。

こんな事を言うと、大抵の人は私を「頭の残念な子なんだな」って思うだろう。

でも、事實は事實。

私は本当に、魔法やドラゴンの存在する世界をこの目で見ている。本や映画でしか見る事のないファンタジーってやつを、生身で絶賛体験中なのだ。

始まりは、二年前。

花も恥らう16歳、高校一年生の夏休み初日。

何の脈絡もなく異世界に召喚された私は、『世界を救う救世主』という超王道な展開に巻き込まれ、言われるがまま旅をした。

色々な出来事があつて沢山の人達と出合つて（この辺は話すと長くなるから端折るけれど）、それなりに自分も成長したと思うんだ、うん。

そして悪の魔王という（これまた超王道な）敵を倒して、世界は救われた。

そこで『めでたし、めでたし』となれば、どれだけ良かった事だろう。

でも私はまたまた『異世界に召喚された女子高校生』のお約束をかましてしまった。

異世界の王子様に恋をしたのだ。

元の世界と異世界との間で揺れ動く心。

私は一大決心をして、それこそを引き裂かれる決心をして、彼に想いを伝えた。世界の間で迷っている心と共に。

そしてその時、王子様の言った一言がこう。

「僕には決められた婚約者がいる。いずれは彼女を妻として迎えなければならぬ。でも、側室としてなら……」

側室。早い話が、愛人って訳だ。

私の住む異世界の国『ファルス』は、正妃の他に側室を持つ事を許されている。しかも、人数に限りは無い。惚れた女の数だけ、後宮の部屋は埋まっていく。なんというリアル大奥。

ああ、素晴らしき一夫多妻制、博愛精神。

正常な思考回路を持っていれば、その時点で断る事もできた筈なんだけれど、轟々と燃え上がる恋の炎に浮かされて、おまけに「本当に愛しているのは君だけなんだ」——なんて美貌の王子様に言われれば、もう脳内はお花畑。

ろくに深く考える事もせず、生まれ育った世界と家族を捨てて（泣く泣くではあるけれど）、私は王子様の手を取ったのだった。

思い返すと、あの時ほど無駄な時間を過ごした事はない。

後宮での生活は、退屈なものだった。それでもって、嫉妬と駆け引きで満ち溢れていた。

暫くのうちは、王子様の『君だけだ宣言』によって幸せな毎日を経験していた私だったが、その内にだんだんと思い始めてくる。

あれ、おかしいぞ——と。

私が後宮入りした時には三人しかいなかった側室も、日が経つに

つれて一人、また一人と増えて行き。

しかも、その誰もが『王子様が愛しているのは私だけなのよ』と主張しはじめた。

そう、あの歩く種馬——もとい、王子様は、後宮の女全てに齒の浮くような台詞を言っていたらしい。

豪華な餌で気持ちを釣り上げ、釣った後は餌を与えない。典型的な遊び人だったという訳だ。

見事に釣り上げられた女——つまり私は、それから王子様を遠ざけるようになり、やがて心の中からもその存在を抹消した。

唯一の救いは、そんな王子様と『清く正しいお付き合い』をしていた事だろう。

奴の為に家族を捨て、友達を捨てた。おまけに女の操まで捨てていたら、恐らく私は舌を噛み切って死んでいたかもしれない。

結局は私の自業自得ってやつなんだけれど。

そして今現在。

私は『彼』、——元宮廷魔術師の、ラグナ・ラグリーズの許で生活している。

元々、旅の仲間であつた彼と私が、何故閨を共にする関係にまで至ったのか——。

それについては、朝食の後にでもゆっくり語ることにする。

「何を一人で考え込んでいるんです？」

「いや、今までの一大叙事詩的なものを……」

「百面相になっていましたよ。まったく、見ていて飽きませんね、貴女は」

……まあ、とりあえず。

今の私は幸せである、という事は、先に公言しておこう。

第4話 幸福な食卓

「貴女に過剰な期待をしていたわけではないのですがね……」

二人で使うには少し大きなサイズのテーブルに、二人分の朝食が並ぶ。

私と向かい合うように席に着いた彼——ラグは、皿の上に乗った奇妙な物体を見つめて、これ見よがしにため息をついた。

彼の言いたい事は十分理解できる。その奇妙な物体を作った私でさえ、目を覆いたいほどだ。

だから……だからもう何も言わないでくれ。

「……念の為に尋ねしますが、これは食べ物ですよね？」

「うつつ……」

「一体何を作ったつもりなのか、教えていただけますか？」

「た、卵焼き、です」

消え入りそうな声で答えると、彼は胡乱な瞳で皿の上の物体、もとい、卵焼きを見つめた。それから徐にフォークで切り取り、そのうちの一片を私の口元に運ぶ。

「はい、あーん」

……馬鹿にしゃがってええ!!

見た目が何だ、食べてみればきつと美味しいはず。

たとえ黄色い卵と消し炭の黒が妖しげなコントラストを醸し出したとしても、明らかに胡椒の分量を間違えているような臭いを漂わせようとも。

よし、食べる！！食べるぞ！食べてやるから、な……。

……。

……。

おかしい。

口が開かない。きつとお腹がすいてないんだ。

目の前の自称・卵焼きを華麗にスルーして、私は手元の紅茶を煽る。

「食べないんですか？　せっかく愛しのフィアンセが食べさせてあげようと思っているのに」

「ぶほっ！！」

ラグの言葉に、思わず紅茶を噴出しそうになった。

「あ、あのねえ、そういう事をホイホイと口に……！！」

「はい」

「むぐっ！？」

ひょい、と口の中に放り投げられる卵焼き。そのまま条件反射で租借すれば、途端に口の中に強すぎる胡椒の香りが広がり、卵の殻（いつの間に入っちゃったんだ、コイツめ。ハハハ）がボリボリと音を立てた。

ま、不味い。思っていたよりも、相当不味い。

吐き出すことはせずに、なんとか飲み下す。うつ……お腹壊したりしないだろうか。

ラグは、そんな私をじつと見つめていたかと思うと、満足そうに微笑んだ。そして、あるうことが、自分の皿の卵焼きに手を伸ばし、食べ始めてしまう。

「ちょっとラグ、無理して食べなくなったっていいよ！？ 卵焼きが無くたって、ピレッツアがあるし」

ピレッツアとは、こちらの世界でいうパンのことだ。食パンよりも、フランスパンに酷似している。

食卓の上には、私が作った卵焼きの他に、そのピレッツアがある。これは市場で買ったものなので、安心して（この表現は些か腑に落ちないが）食べられる。

黙々と卵焼きもどきを食べるラグを、私は呆然と眺めた。ふと気付けば、最後の欠片を食べ終えたところで、彼は優雅に口元を拭いていた。

「貴女が折角作ってくれたものですからね」
「ラグ……」

あ、今、物凄く胸がキュンとした……。

「それに、今から慣れておかないと。これから毎日、貴女の料理を食べる事になるのですから」

「……あ、そう」

どうしてこう、一言多いんだろう。

それでも、きっちり平らげられた皿を見て、悪い気はしない。何だかんだ言いながらも、彼は結局優しいのだ。

第5話 彼という男

共に旅をしていた頃のラグナ・ラグリーズの印象は、『物事を深く考えない人』だった。

今でもその印象は変わってはいないが、共に過ごすうちに、彼の本当の姿も垣間見ることができた。

膨大な知識と、強力な魔術を操る力は、魔法王国と名高いファルスでも群を抜いて優れていた。彼の冷静な判断と決断力には、何度助けられたか分からない。

天才だと称される魔術の腕に関しても、人知れず努力している事を、私は知っている。

それから、親しい人間に対しては意外と心を砕く。

出会った頃は、話しかける事すら出来なかったのに。

私は幾度となく彼に救われている。

王子の愛情が偽りだと気付き塞ぎ込んでいたあの頃も、彼は私を励ましてくれた。決して押し付けがましくない、自然な優しさ。それは、空っぽになった私の心を、いつの間にか温かな感情で満たしてくれていた。

そして、そんな優しさに気が付いた時、私の中では既に彼への想いが抑えきれないほど大きく育っていたのである。

「梨乃、私の着替えを見るのがそんなに楽しいですか？」

仕事へ向かう為、身支度を整えていたラグの姿をぼんやりと見つめる私に、そんな声がかかる。

我に返って首を横に振る。その大きな背中に見惚れていたなんて、言えるはずがない。

魔術師用の、ややゆったりとしたローブを纏う。見慣れた姿だが、ラグにはその格好が一番似合っていると思う。

首元に絡んだ銀系のような髪を払い除ける。私の故郷では、滅多に見る事のない髪の色だ。肩よりも少し長いその髪を、慣れた手つきで一つに纏める。チラ、と覗いた首筋からは、目に毒だと思うほどの色香が立ち昇っていた。

女の私より色気があるって、どうなのよ。
悔しいような、悲しいような、複雑な気分。

……。いや、色気なんてそのうち身に付いてくるものさ。きつと、多分。

出勤するラグを玄関まで見送る。

元宮廷魔術師という肩書きを持っている彼の現在の職場は、『ワラワヘム』と呼ばれる魔術師協会の総本山だ。何度説明されても私にとってはチンプンカンプンだが、魔術師にとっては名の知れ渡る場所らしい。とにかく凄いところ、とだけ理解している。

「あまりフラフラと出歩かないで、いい子にしていして下さいね」

ポンポンと頭を撫でられる。

「私はペットか!？」

「可愛い婚約者ですよ」

「うっ……」

不意打ちを食らった。その笑顔は反則だぜ。

「……その、さ」

「はい？」

「ラグは、本当に……私でいいの？」

昨夜、私達は結婚の約束を交わした。晴れて婚約者同士となった私とラグだけど、本当に彼の相手が私なんかでいいのだろうか、と思ってしまう。

ラグの気持ちを疑っているわけではない。
ただ、あまりにも幸せすぎて、夢ではないのかと考えてしまうのだ。

「梨乃……昨夜あれだけ愛し合っておいて、今さら何を言っているんですか」

「さりと変な事を言うなっ」

「まあ、愛しすぎて最後までできなかったのが辛いところですが」
「だからそういうことを……って、え？ 最後まで？」

んん？ どういうことだ？

そう言えば、途中からの事は私も覚えていない。とにかく必死だったから……って、おい。何を言っているんだ自分。

およそ玄関先でする会話じゃないぞ、これ。

「覚えていないんですか？ 途中で気を失ったじゃないですか、貴

女」

「だ、だって、何も考えられなかったんだもん……ラグは意地悪だし……」

「あれだけ可愛い泣き顔を見せておいてお預けさせるほうが、よっぽど意地悪ですよ」

「おあずけて……」

ど、どうしよう。ここは謝るべきところなのか？

気を失うほど私を苛めていたことのほうが、よっぽど性質が悪いんじゃないのか？

「と、とにかく、この話はおしまい……！」

「ご近所さんに聞かれたら、なんと思われるやら。」

早く仕事に行きなさいとばかりに、私はラグの荷物を押し付ける。荷物といっても、魔術関係の書物や書類を、大雑把に紐で括ってあるだけなんだけれど。

ラグはそれを片手で受け取ると、ニヤリと笑って私に詰め寄る。海を映したかのような、深い青を湛える瞳。

私はこの瞳に弱い。この中に、今自分の姿があるのだと思うと、どうしようもなく切ない気持ちになる。

「な、なに？」

「いつてらっしゃいのキスは？」

「ええっ!？」

ベタベタな新婚夫婦のやりとりじゃないか。でも、それが少しだけ嬉しいと感じてしまっている私は、きっと脳味噌まで桃色に染まっているんだろう。

誰も居ないのに、キョロキョロと辺りを見回す。それから軽く背

伸びをして、素早くキスをする。

いってらっしゃい。

——言おうと思って口を開けば、ラグの空いた腕が私を引き寄せ、唇を塞いだ。

そのまま、長いキス。

されるがままに受け入れて、頭の中はすっかり蕩けている。

「ん……」

「……このまま続けましょうか？」

唇を離すと、熱に浮かされた彼の瞳が見える。

朝からそんな元気は無い、と言っていたのは、一体どこの誰だ。

「仕事に遅れるよ」

「はいはい」

「返事は一回！」

ふざけ合いながら、玄関出る。

私はラグを見送り、彼は軽く手を振って応える。

遠ざかる背中を見つめながら、本当に奥さんみたいだな……なんて考えて、幸せな気持ちに浸る私であった。

第6話 私達の複雑な関係

さて。

旅の仲間であつた私とラグナ・ラグリーズが、何故こんな関係に至つたのかをお話ししておこう。

およそ二年前、私はこの異世界に召喚された。
それから一年半近く、世界を救う為の旅に出て、半年前に後宮へと入った。

私とラグの付き合いは、王子様とのそれよりも長い。
その頃、宮廷魔術師として城に召されていたラグは、王の決定に従い召喚の魔術を執り行つた。それによつて私はこの世界へとやつて来て、彼を伴つて旅をすることとなつた。

終わりの見えない、苦しい旅だつた。今思うと、それもいい思い出だけだ。

旅の間中、ラグはずっと私を守り、励ましてくれた。いつも側にいてくれたから、それが当たり前のように感じていた。だから、自分の本当の気持ちも、彼の気持ちも、ずっとずっと見逃していたのだ。

王子と出会つたのは、旅を終えてからの事だつた。

世界救済の成功を祝うパーティーがファルスの城で開かれ、世界を救つた聖女として私はその場に出席した。誰もが私を聖女として敬い、賞賛の言葉を送つた。

あの時の私は、そんな現状にうんざりしていたのかもしれない。
だから、私を一人の女性として愛していると言つた王子様に、あんなにも惹かれたのだ。

貴女は貴女のままでもいい。無理に救世主然とすることはない。――いつかそう言ってくれた、ラグの事など気にも留めずに。

後宮に入ることになった、とラグに伝えた時、彼は笑って祝福してくれた。

おめでとう、幸せになりなさい、と。

それから、冗談交じりでこうも言った。

――辛くなったら、いつでも逃げ出してしまいなさい。

宮廷に仕える者の台詞ではない。だが彼らしいと、笑ってしまった。

ラグは心を不当に縛るような人間ではない。それは一年半もの旅の間、近くで彼を見てきた私だからこその分かることであつた。

信頼関係という点において、私達の繋がりは確固たるものだった。王子様でも、割り込めないほど。

宮廷魔術師と王子様の恋人という関係ならば、普段の生活において接点はほとんど無い。

しかし私達は、世界救済を成し遂げた当事者であつたから、その後も何かと顔を合わせ事は多かつた。式典への参加、闇の支配から解かれた国への視察。

城暮らしは退屈だつたから、そうやって外の世界を見て回れるのは嬉しい事であつた。

王子との愛を育むその裏で、後宮の部屋は着実に埋まってゆく。やがて女達は王子の愛を声高に主張し始め、王子の心を不審に思う自分がいた。

一人きりの夜、もう帰れぬ元の世界を思つて泣いた事もある。愚かにも、自分が選んだ道だというのに。

旅をしていた頃、隣にはラグがいた。両親や友人を思い泣いている私の側で、ずっと見守っていてくれた。でも、後宮ではたった一人。

そんな時に、自分がどれだけラグに救われていたのか、ようやく気付くのだった。

後宮入りして四ヶ月も経つと、王子への愛情は綺麗さっぱりと消えていた。

そして新たな気持ちが——ラグへの想いが、日に日に募つてゆく。気持ちを伝えるつもりはなかった。ただ姿を眺めて、時に笑いかけてもらふ、それだけで十分だと思つたから。

王子は私の心変わりを知らなかった。

ある日、今まで散々放っておいた私の元へと現れて、ケロリとした顔で言つたのだ。契りを交わそう、と。

それまで清いお付き合いをしていたとはいえ、私は王子の側室。断る事などできない。だから相当の覚悟を決めて、受け入れようと努力したもの——できなかつた。

第7話 とある過去の喜劇

「……っ!! やっぱり嫌!!」

そう叫ぶなり、私は覆いかぶさろうとする青年を蹴飛ばした。
私の足は、その脇腹に見事なまでのクリーンヒットを決める。

ぐほ、と苦痛の声を漏らしてベッドの隅に転がったのは、金髪碧眼の見事な美貌を持った青年——魔法大国と名高い『聖国ファルス』の正当な王位継承権を持つ、真正正銘の王子様だ。

「ギアン、ごめん。でもやっぱり無理なものは無理!!」

そう言い残して、夜着のまま部屋を飛び出す。

「梨乃!? 待つんだ、梨乃!!」

王子様——ギアンの声を背中に受けながら、ひたすら走る。
待てと言われても、従う気はさらさら無い。純朴な乙女の気持ち
を弄んだ罪だ、ミドルキックの一発くらい多めに見ろ、コノヤロウ。

指笛の音が遠くで響いている。近衛兵が出動したのだろう。王子
様を足蹴にしたのだから、まあ当たり前か。

捕まったら不敬罪で罰せられるのだろうな。あんな男でも、一応
は王族なのだから。どうせ罰を受けるなら、もっと殴っておけばよ
かった。

私の心は軽やかだった。今まで心を縛っていた枷が、音を立てて
崩れてゆくを感じる。

清々しい。こんな気分は久しぶりだった。

自慢ではないが、体力だけは取柄だ。

それでも、屈強な兵士に取り囲まれればひとたまりも無い。捕らえられるのは覚悟のうえだった。

ただ今は、逃げ出したかった。あのスケコマシ王子に黙って抱かれるなど御免だ。牢屋の壁のシミを一日中数えている方が、よっぽどマシなように思う。

後宮と王城本館を繋ぐ連絡通路を駆け抜ける。深夜だけあって、人通りは皆無だ。

月の綺麗な夜だった。こんな夜に愛する人と結ばれたら、どんなに素敵なことか。そんな事を考えて、今の自分の状況を顧みる。ロマンチックの欠片も感じられないこの状況に、思わず笑いが込み上げた。

「——梨乃!!」

王城本館に辿りついてすぐに、私はラグに呼び止められた。何処から聞きつけたのか、彼は後宮での騒動を把握していた。

「ラグ……私、逃げちゃった。やっぱり駄目だった……ギアンのこと、受け入れられない……」

「梨乃……」

ラグは私を責めもせず、怒りもしなかった。ただ黙って頷くと、後を追ってきたギアン達から守るように、私を背中に匿った。

「梨乃、こっちへ来るんだ。どうして僕を拒絶する?」

大勢の近衛兵を伴ったギアンが、手を差し伸べる。

どうして——なんて、言わなければ分からないのかこの男は。自

分の胸に手を当てて、よく考える。

まったく、おめでたい頭をしている。いや、脳内がお花畑だった私も、人のことは言えないか。

「ギアン王子……梨乃をどうなさるおつもりですか？」

「王子を足蹴にしたんだ。本来ならば不敬罪で処罰を与えるところだけれど、彼女の心掛け次第では考えてやってもいい」

「梨乃、ギアン王子はそう言っていますか？」

「冗談じゃない。本当なら、あんたのナニを切り落としてやりたいところよっ！！」

ラグの背中から顔を出して、ベー、と舌を出す。ギアンはワナワナと震えると、ラグに向かって指を突きつけた。

「そこをどけ、宮廷魔術師」

「梨乃はギアン王子を拒んでおられる。彼女を貴方にお渡しするわけにはまいりません」

「臣下が僕たちのことに口を挟むな」

「生憎ながら、つい先程宮廷魔術師としての任を降りました」

え……？

ラグの言葉に、私も思わず目を瞠る。そんな事、一言も聞いていない……。

「ふん、だからと言って、王子に逆らっていい筈がないだろう」

「いいえ、ギアン王子。私は宮廷魔術師の任を終えた時点で、ワラワヘム配下の魔術師となっております」

「……ワラワヘムだと！？」

ギアンが驚きの声を上げる。取り囲む近衛兵達からも、どよめき

が起こっている。

——ていうか、ワラワヘムって何さ？ 事態が飲み込めないでいる私を置き去りに、ラグは話を続けた。

「つきまして、私は貴方に従う理由はありません。勿論、王にさえも」

「くっ……」

「ああ、それから……梨乃の処遇についても仰せつかっております。彼女が不遇のうちにいるのであれば、ワラワヘムにお迎えせよ、と」
「何だって!？」

つまり——……ええと、どういう事？

理解力の乏しい私には、話の流れが分からない。

ラグを見上げると、優しい笑みが返ってくる。こんな時に不謹慎だけど、思わずときめいてしまう。

「王には既に許可を頂いております。梨乃の判断に任せる、との事です……」

そう言いながら、不敵な態度でギアンと近衛兵達を見渡すラグ。彼らがこちらに危害を与えないように、視線だけで牽制する。

悔しげに歯噛みするギアンは、ラグと私を交互に睨むと、引き攣った笑顔を見せた。

「ふん、いいだろう。ならばその女に聞くといい。ここに残るか、ワラワヘムへと行くか」

「……という事ですが梨乃、どうします？」

「ええっ!？」

「後宮に残りますか？ それとも、私と共に行きますか？ 選ぶのは、貴女です」

「ラグと行くっ!!」

……即答してしまった。

ワラワヘムとやらがどんな場所か知らないけれど、それでもラグと共に行けるのなら。

ギアンは私の選択に相当衝撃を受けているようで、言葉を失っている。むしろ私としては、自分が選ばれると思っていた貴方にびつくりだよ。その自信は一体どこから来るんだか。

「本当にいいですね、梨乃」

「うん」

「後悔は……」

「しない。ラグと一緒にいられるなら、どこだって構わない。私……ラグのこと、好きだもん」

どさくさに紛れて何やら口走ってしまったけれど、そんなことは構わなかった。

ラグは私を見つめると、今まで見たこともないくらいの、最上級の笑みを浮かべた。な、なんだこの人、笑顔だけで私を気絶させるつもりか？

引き寄せられ、肩を抱かれる。今までこんな風に密着したことはないのです、私は緊張のあまり呼吸困難に陥りかけた。比喻ではなく、本気で。

「ギアン王子。梨乃の答えを聞きましたね？」

静かだが、有無を言わせない凜とした声。

ギアンは私達を一瞥すると、ふん、と鼻を鳴らして背中を向けた。

「……そんな女、くれてやる」

「はい。ありがたく頂戴します」

「くっ……いつか後悔させてやる。覚えていろよ」

わお。テンプレート通りの台詞、ありがとうございます。

遠ざかってゆくギアンの姿。一時はあんなに想っていたのに、今はなんの感情も湧かない。それよりも、これは夢ではないのかと、不安になる。

ラグは私の気持ちを悟ったのか、肩を抱く腕に力を込めた。

「大丈夫ですよ。不安になることなど、ありませんからね」

「……うん」

「今まで、よく頑張りましたね」

「……うん！」

言葉が、心に染み渡る。

勝手に涙が溢れてきて、止められない。

ラグが側にいてくれるから。その優しさが、全部包み込んでくれたから。

「もう、寂しい思いはさせません。私と一緒に生きましょう、梨乃」

こうして、私の後宮生活は幕を閉じ——そして新しい世界が広がった。

第8話　今へと至る物語【前】

城を出た私とラグは、ひとまず件の場所へと向かった。

ワラワヘム。

魔術師協会の総本山。魔術師にとっては『聖域』であり、他の者にとつての『魔窟』、世界の変革を促す、神の臨む場所――。

うーん……聞けば聞くほど分らない。というか、胡散臭いことこの上ない。

「魔術師なんて変わり者が多いですからね。分らないのも当然ですよ」

そうは言うけど、ラグ。貴方もその魔術師の一人なんじゃ……と思ったが、口に出さずに心の中に留めておいた。

目的の場所は、聖国ファルスの城都より馬車で二日ほどの、大きな古い街の中にある。エンデと呼ばれるその街は、白い石壁で造られた建物と、縫うように走る水路の水で美しい色合いを見せていた。聞けば、宮廷魔術師になる前に、ラグが住んでいた街だという。

ワラワヘムへ勤めるにあたり、住む家は魔術師協会（これも何だか胡散臭いよね）が用意してくれた。高台に建てられた、一階建ての一軒家。白を基調として造られたその家は、なかなかセンスがいい。キッチンやお風呂場もゆつたりとしていて、窓からは美しい街並みを見ることができる。

ラグは当たり前のように、今日からここが私達の家ですからね、
と言った。

突然の同棲宣言！？ いや、一緒に生きようと言われた時から、
『いずれはこんな事に』と期待しなかったわけではない、のだが…
…。

あらためて彼の口から言われると、その、なんというか――凄く
照れる。

一人もじもじしている私を横目に、ラグはテキパキと馬車から荷
物を降ろし、硬貨の支払いまで済ませていた。この後すぐにワラワ
ヘムへと行かなければならぬらしい。

旅の汚れが目立つ服から、綺麗なものに着替えて、彼に連れられ
るまま家を出る。

途中でお守りのアミュレットを手渡され、必ず身に付けておくよ
うに、と言われた。

「魔力の無い者にとってあの場所は危険ですからね。毒の沼地に裸
で飛び込むようなものです」

おい、その物騒な例えは何だ？ というか、そんな危険な場所な
のか。恐るべし魔術師協会。

そんな危険な場所がこの街のどこにあるのだろう、と思いつつ連
れて行かれた先は、街の中心部。ひしめきあった街並みの中に、ひ
っそりと立つ古びた建物だった。

意外にも普通の建物で、拍子抜けしてしまう。もっとこう……近
寄りがたくて、ドーンと構えた（表現がアバウトすぎるぞ自分）、
威厳のある場所かと思っていたんだけど。興味本位で窓から中を覗
くと、ずらりと並んだ本棚が見える。

「図書館と間違えてないよね？」

「ちゃんと看板に書かれているじゃありませんか、ほら」

ラグが指をさす先には、異国情緒に溢れた文字が書かれた木製の看板。

かろうじて、『魔術師』と『こちら』までは読める。

日本語に慣れ親しんだ私にとって、この世界の文字は難しすぎる。なんだ、あの記号のような形は。

言葉を聞けたり話したりできるのは、ラグ特製の『魔術を仕込んだ指輪』があるからで、それがなければこの世界の言葉などほとんど理解できない。

旅の間にラグから教わってはいたものの、覚えられたのは簡単な挨拶程度で、今でも進歩は見られない。

……勉強は苦手だったんだ。特に、語学に関しては。

建物内に入ってみても、特別変わった様子は見られない。古びた図書館、といった雰囲気だ。

ラグは入り口の受付らしき席に座る女性と軽く挨拶を交わし、建物の奥へと進んで行く。そして、一番奥にある大きな扉の前に立つと、私に目配せした。

「この先にワラワヘムがあります」

「この先って……」

「まあ、入ってみれば分かりますよ」

そう言うなり、ラグは扉を開いた。

……驚いた。

異世界に来てから何かと驚くことが多すぎて、最近ではちょっとした事じゃ動じなくなっていたけど、これには正直、言葉を失った。

扉の向こうに街が見える。エンデの街並みではない。薄汚れた石造りの建物が詰まるように立ち並び、雑踏は人（もちろん魔術師）で溢れかえっている。道沿いに軒を連ねる店舗のほとんどが魔術関係の品を取り扱っているようで、あちこちから奇妙な呪文が聞こえてくる。

うーん……怪しすぎる。

それにしても、あんな普通の建物の中に、こんな街へと続く扉があったとは。凄いいじゃないか、魔術師協会。でも、エンデの街の人は知っているんだろうか？ 一般人にとっては『魔窟』とまで呼ばれる場所が近くにあるなんて知られたら、大変ではないのか？ そんなことを訊ねると、

「エンデに住んでいるのは、ほとんどが魔術師ですよ」

成程。それなら問題ないわけだ。

しかし住人のほとんどが魔術師となると、私はかなり浮いてしまうのだろうな。何たって、私は魔力の欠片ほども持つてはいない。ラグは違うけれど、魔術師の中には人を魔力の有る無しで判断する人間もいるらしいから、そういう人達にとって私は透明人間にも等しいというわけだ。

そういう訳ですから、私から離れないでくださいね——と言うラ

グの手を握って、先へ進む。目指すのは、この通りの先に見える、
天まで聳えた巨大な塔だ。あの塔こそが魔術師にとっての聖域、ワ
ラワヘムだという。

いざ、本丸！！

緊張のあまり妙ちきりんな気合を入れる私を連れたまま、ラグは
慣れた様子で塔へと向かった。

第9話 今へと至る物語【後】

遠くからでも全貌を見ることの出来ないその塔は、近くで見上げてみてもやはり圧巻で、気圧されてしまいそうになる。

しかし、こんなに高く造る必要があるのだろうか。頂上にいたつては、雲に隠れて姿さえ見えない。

……いつか言葉をバラバラに別けられても知らないぞ。

そんな事を考えながらぼんやり歩いていると、ラグが小さく笑ってこちらを見ていた。

「さつきから口が開きっぱなしですよ」

「だって、やたらとデカいんだもん。何でこんなに高く造っちゃったの？」

「このワラワヘムは大賢者リューカーンの建造物ですよ。彼は天上の女神に恋をして、彼女に会いに行く為にこの塔を造った、とされていますが……」

「へー……それで、女神とやらには会えたの？」

「塔の建設中に墜ちて亡くなりました」

「ああ、そう……」

大賢者って言われるほどだから相当頭が良かったはずなのに、何でそうなってしまうんだ。本気で女神に会えると思っていたのだろうか。

でも彼女に会いたい一心でこれを造った男気だけは素晴らしい。

大賢者様に合掌。

塔の中に入ると、まず広いホールがあり、壁際に沿って扉が幾つ

も並んでいた。というよりも、それしかなかった。

意外とあっさりした内部構造だ。こんなに高い塔だというのに、階層は一つだけしかないなんて勿体無い。見上げると、吹き抜けになっいて天井が見えない。

「デッドスペースばかりじゃないか。匠に怒られるぞ」

「はい？ 何のことです？」

「うっん、何でもない」

私の故郷のテレビ番組の話をしたところで、ラグにはまったく分からないだろう。話したら長くなりそうなので、とりあえず笑って誤魔化しておいた。

広いホールの中を歩き、幾つもある扉のうちの一つに辿り付く。

黒塗りの重厚な扉には、魔術師だけが使う事のできる古代文字が書かれている。勿論、私に読めるはずがない。ゲームのラスボスがいる部屋の扉みたいだ。

ラグは扉を開く前に、私に向かって言った。

「この部屋には、ある危険人物がいます。気を抜かないでくださいね、梨乃」

「えっ、危険人物！？」

ラグが言うからには、相当危ないんだろう……。

私はラグの背に隠れるようにしながら、その中へと足を踏み入れた。

「いらつしゃゝい、梨乃ちゃゝん！ 会いたかったよゝ！ うーん、思ったよりも可愛い子じゃないかあ、うんうん、若い子はいいいねやつぱり！！ もうね、いつ来てくれるんだらうって、オジサンずつと待っていたんだよゝ！！！」

やたらとテンションの高い男性に抱きしめられて、グリグリと頬ずりをされる。ロマンスグレーを思わせる、気品漂うチョビヒゲが、サワサワと私の肌を撫でる。くすぐりたい、っていうか痛い！！ 部屋に入るなり、そんな熱烈すぎる歓迎を受けて、私は動く事すらままならない。

……危険人物ってこういうこと！？ 危険の意味が違うだろう！！
ラグは、啞然としてされるがまの私を男性から引き離すと、背中に匿う。一気に不機嫌な表情へと変わり、目の前の男性に向けて胡乱な視線を投げた。

「梨乃に何をするんです、この変態」

「ああっ！？ ラグナ、何をする！！ ずるいぞ、梨乃ちゃんを独り占めするなんて。私だって彼女に会えるのを楽しみにしていたんだ！！」

「うるさいですね。これ以上梨乃に不貞を働くというのなら、奥方に言いつけますよ」

「うつ……！！ ひ、卑怯だぞ、ラグナ！！」

ラグの背中で二人の会話を聞きながら、あの人の奥さんは大変そうだな、なんて事を考えてしまった。

「梨乃、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だけど……びつくりした……」

「まったく、とんでもない人ですね貴方は。梨乃に変なトラウマが残ったら、どうしてくれるんですか」

「ええ、だって……」

「だって、じゃありません。金輪際、梨乃には触れないで下さい」

ぴしゃりと言われて、男性はシュンと頭を下げた。

この人、見た目は『素敵なオジサマ』といった感じなのに、見た目と性格が一致しない。

「ごめんよ、梨乃ちゃん」

「えっ！？いや、その……大丈夫ですから」

自分よりも明らかに年上のおじさんに、真っ向から謝られるというのは妙な感覚だ。それにしても、この人は一体何者なんだ？ ラグと似たようなローブを着ているし、何よりこの場所にいるという事は、この人も魔術師なんだろうけど……。

そんな私の疑問に気が付いたのか、ラグは深いため息をつくど、嫌そうな表情を浮かべながらも男性を紹介してくれた。

「彼はアルバート・ラグリーズ。このワラワヘムを統括している、魔術師たちの長で……」

「そう、私はえらい大魔術師。そんでもって、ラグナの師匠である」

えっへん、と意味も無く胸を張る男性——アルバートさんの姿に、ラグナがぼつりと呟く。

「……認めたくはありませんがね。ちなみに、私の養父でもありません」

「え、ラグのお父さん!？」

「お、お父さん……!! なんといい甘美な響きだ、素晴らしい!! おお、我が娘よ!!」

「梨乃、甘やかさないでいいですよ。変態オジサンで十分です」

「えっと、じゃあ……おじ様で」

「そんなっ!？ お父さんと呼んでくれて構わないのだよ!？」

……このやりとり、疲れる。

そういえば、以前にラグの身の上話を聞いたことがある。孤児であつた彼は、その魔力の強さを認められ魔術師の家に養子に入つたのだと。

この人に育てられたにしては、ラグはまともに成長したんだな。反面教師ってやつだろうか。

でも、ラグの養父ということで、アルバートさんへの印象は一気に良好になつた。そうか、この人がラグを育ててくれたんだ……。

彼の家族を前にしてると思ったら、少し緊張してしまつた。まだ挨拶も済ませていないことに気付いて、私はおずおずとラグの隣に並び、頭を下げた。

「大崎 梨乃です。ラグには、この世界に來た時から色々とお世話になりました。今回の事でも、助けられてばかりで……」

私の言葉に、アルバートさんはうんうんと頷くと、少し真面目な態度になって微笑んだ。

まともにしていれば、本当に素敵な人じゃないか。目尻の笑い皺がまぶしいぜ。

「ラグナから色々と聞いてはいたよ。知らぬ世界の為に身を尽くしてくれた君が、これ以上辛い思いをすることはない。これからは私達が、君を全力でお守りしよう……罪滅ぼしにもならないだろうが」

私がこの異世界へ召喚されたのは、このワラワヘムからファルスへの神託があつた為だと、ラグはつい先日教えてくれた。だから召喚魔術を使えるラグが城へ召され、私を呼んだのだと。

「あの、あまり気を使つて頂かなくても平気です。たしかに、この世界へ来たばかりの頃は、どうして私がこんな目に、つて思っていました。でも今は……ラグが側にいてくれるから——」

「梨乃……」

ラグの手を取ると、すぐに強い力で握り返された。ラグがいれば、大丈夫。一人じゃないって感じられるから。

「そうか……ラグナを大切に思ってくれているんだね、ありがとう」

アルバートさんの顔は、まさに親が子を思うそれだった。

この人も、ラグナを大切にしてくれているんだ。そう思ったら、胸のうちに温かいもので満たされた。

「うんうん。この様子なら、孫の顔を見るのもそう遠くはないな！はっはっはっ！」

「ええっ！？ま、孫！？」

いい雰囲気だったのに、何だっけいきなりそんな所までぶっ飛んでしまっただ！？

ラグはラグで、

「その事なら任せておいてください」

なんて、しれっとして答えているし。妙なところで話に花を咲かせるな!!

もしかしたらこの二人、案外似た者親子なのかもしれない……はあ。

——そしてこの日の夜、気持ち確かめ合った私とラグは結ばれたのだが……。

彼の口から出る攻め言葉のオンパレードに、『この親にしてこの子あり』という言葉を、私は身をもって実感するはめになったのである。

第9話 今へと至る物語【後】（後書き）

回想編終了。

ラグとの一夜については『思い出せません！』と梨乃が申しあげます（笑）

番外編 とある魔術師の【約束】の記憶（前書き）

本編よりも本編らしい番外編。
ラグナ視点。シリアスの為、注意。

番外編 とある魔術師の【約束】の記憶

彼女と旅をしていた時のことは、今でもよく覚えている。

ワラワヘムの神託により、この地へ来る事を定められた少女。自らの世界から切り離され、この世界の為に尽くす事を定められた少女。一人きりで苦しみに耐えることを定められた少女。

異国の響きを纏うその名は、リノ。

私と彼女の出会いは何を意味して、そして何を齎すのか。その時はまだ、知る者はいない。

薄暗く湿った牢の中で、ラグナ・ラグリーズは小さく息をついた。カビの臭いが充満する空気は、一呼吸しただけでも肺が蝕まれそうになる。壁際に並んだ燭台の上には、頼りなく燃えている蠟燭の炎。その灯りも、どこからか吹き込む隙間風によって、今にも消えそうなほど揺らいでいた。

冷たい石壁に囲まれた其処は、およそ人が留まるべき場所ではない。

こんな少女ならば、尚更――。

（聖女となるべくこの地へ召された者に、このような仕打ちを与え
るとは。大国と名高いファルスも、王の心は矮小であったか）

内心で輕蔑の言葉を吐きながら、ラグナは目の前の少女を見つめ
た。

鉄格子の向こう、壁にもたれて頂垂れている姿が痛々しい。

「気分はどうですか？」

彼女の心を刺激しないよう、優しく声を掛ける。だが、牢に響く
自分の声は、どこか無機質なように思えた。

少女はゆっくりと顔を上げる。

混乱、憔悴——先程まで彼女を支配していた感情は消え、今その
瞳に浮かんでいるのは、絶望。薄闇の中に浮かぶその姿は、哀れな
くらい無気力で、まるで魂が抜けてしまったかのようなだ。

「……最悪、です。どうして私が、こんな目にあわなきゃいけない
の……？」

ぼつり、と掠れた声が聞こえる。

異国の服を纏った少女の剥き出しの膝には、血を滲ませる生傷が
幾つも見えた。

相当手荒に、この中へ放り込まれたのだろう。

王への暴言、それがこの少女の罪。不敬は、この国にとって重罪
にあたる。

少女——異世界より召喚された聖女となるべく彼女は、あまりに
突然の出来事に取り乱し、罵りの言葉を上げたのだ。

無理も無い、とラグナは思う。自らの世界から切り離され、訳も
分からぬうちに見知らぬ場所へとやって来たのだから。

「申し訳ありません。この城の兵士は、力の加減を知らぬ者ばかりですから」

「申し訳ないって思うなら、私を帰してよ……」

「それは出来ません」

何度目になるか分からない少女の嘆願を、ラグナははっきりと拒絶する。

「貴女は神託によつて選ばれた聖女。どうか使命を果たし、この世界を救つて頂きたいのです」

「またその話……？ 何度も言っているけど人違いよ。私が聖女なわけ、ないでしょ……ここが異世界ってだけでも、頭がおかしくなりそうなのに」

少女はそう言つて頭を抱えた。

涙を隠そうとしているのだろう。嗚咽を必死に堪え、震える手を固く握っている。

「この世界、おかしいよ。自分達の世界を守る為なら、関係の無い人間を巻き込んでもいいって、当たり前のように思つて……そんな事が、許されてる……」

おかしい。その言葉はもつともであった。

しかし、世界を救う為に彼女が——聖女が必要な事も、ラグナは理解している。

だから、非情な選択を迫るほか無い。

「では、ここに留まりますか？ それとも、逃げますか？」

呟くように詠唱すれば、一瞬にして牢屋の錠が解けた。ギィ、と耳障りな音を立てて、重厚な鉄の扉が開く。

ラグナの真意が分らずに、少女は驚きに目を瞠る。

「逃げても、いいの？」

「逃げられるものなら。すぐに追手はかかるでしょう。それに、どこへ逃げても今の世界に安らげる場所はありませんよ。闇の力は聖女たる貴女を見つけ出し、必ずやその存在を消そうとするでしょうがね……」

「どこへ逃げても同じ、か……」

少女の表情が、益々暗く沈む。

我ながら酷いものだ、とラグナは自嘲する。独りこの世界に放り込まれ、心細い思いをしている彼女に、こんな事しか言えないとは。だが、今の少女を無理矢理旅に連れ出したとしても、世界は救えない。剥き出しの負の感情は闇に魅入られ、いずれは心を蝕むだろう。

だから、自ら道を選ばせる。

逃げ道を周到に潰し、その選択が最善なのだと思わせる為に。

「もし……もし私が世界を救う事ができたら……元の世界に帰してくれる？」

「貴女が望むのであれば」

帰還の魔術は、まだ確立されていない。

しかし、ラグナは少女に誓った。それが、彼女をこの世界へと召喚してしまった自分出来る、唯一の罪滅ぼしだ。

必ず彼女を元の世界へと帰してみせる。

「さあ、どうしますか？ 選ぶのは——貴女の意味です」

たとえその答えが、見えない手によって導かれたものだったとしても——聖女は、自らの意思で歩かなければならないのだから。

「約束、してくれる？」

「はい。必ず」

「……私に、世界が救えるのかな？」

「お手伝いします。貴女を守り、支える事を誓いましょう」

旅の結末が、どんなものになろうとも。

「分かりました……貴方を、信じます」

差し出されたラグナの手を、少女が握る。苦勞を知らない、小さな手だった。

そしてこの瞬間より、彼女の運命は決められた。世界の期待を一身に背負う、救世の聖女としての運命が。

番外編 とある魔術師の【約束】の記憶（後書き）

番外編『とある魔術師の〜の記憶』は基本的にシリアスな感じで進みます。

本編の補足的なものとしてご覧下さい。

第10話 乱入者、登場！？

異世界に来て二年経つが、ここ数日の忙しさは怒涛の勢いだった。世界救済の旅もここまで慌ただしくはなかったし、後宮にいた頃は退屈な日々を送っていたから、目まぐるしく変わる状況に思考が追いつかない。

家のリビングにまとめられた荷物を解きながら、昨日までの出来事を思い返してみる。一つ一つゆっくりと、これが夢ではないのだと噛み締めながら。

私の荷物といっても、持ってきたものはごく僅かだ。

この世界へ来た時に持っていた鞆、その中に入っていた手帳とシヤープペン、化粧道具、読みかけの恋愛小説に、電池の切れた携帯電話。それから旅の間に買った衣類が少し。

後宮にいた頃王子から貰ったドレスや宝石の類は、すべて売り払ってお金に換えた。使えるものは全て使うという私のモットーに恥じめ、遅しい処世術だ。

8割がたはラグの私物なので、衣類の他は触らない事にした。魔術関係の品も多くあるはずだから、むやみに触って妙な呪いを貰っても困る。

本当なら、昨夜ラグと共に片付けようと思っていたのだけれど――まあ、色々と忙しかった為に進んでいない。

……『何を』していたのかは、言わずとも察していただけだろう。

とりあえず衣類を全て寢室のクローゼットにしまう。部屋を見渡

せば、生々しく乱れたベッドが視界に入り、何故か生唾を飲み込んでしまった。

昨晚の記憶が蘇る。

間近にある青い瞳、憎たらしくなるほど見事な白い肌、形の良い薄い唇。初めて指を通した銀髪は信じられないほどサラサラだったし、細身だと思っていた身体には適度に筋肉がついていて、力強かった――。

……意外と男らしかったな、なんて。

ああ、まずい。ドキドキしてきた。私は昼下がりの団地妻か。とりあえず落ち着け。深呼吸、深呼吸。

いそいそとベッドの乱れを直して、逃げるように寝室を後にする。

そうだ、今日の晩御飯はどうしよう。

昨日、ワラワヘムへ行った帰りに市場を教えてもらったから、買い物に行こうかな。今のままでは日用品も不足しているし、洋服も欲しい。

折角天気もいいことだし、散歩がてら出掛けよう。

そんな事を考えながら、調子の外れた（実は音痴なのだ）鼻歌交じりに掃き掃除をしていると、玄関の扉が叩かれる。

一体誰だろう？

この住処を知っている知り合いはまだいないはずだ。荷物が届くわけもない。もしかしたら、ご近所の方だろうか。

だが、『無闇に玄関を開けてはいけませんよ』というラゲの言い付けを思い出し、扉を開ける事を躊躇してしまった。その間に人の気配が玄関先から消える。

……ご近所さんだったら、悪い事をしたなあ。ていうか、そのうち挨拶にも行かなくちゃ。

「やる事いっぱいあるもんね。早く掃除を終わらせて、買い物こ
うと」

気を取り直してリビングに戻り、掃除を再開するべく箒に手を掛
け――。

「見つけたぜ、梨乃っ!!」

そんな声を上げながら一人の男が押し入ってきた。
大きな破壊音と共に、窓を突き破って……。

第11話 誰様俺様魔王様

あまりにも突然の出来事に、私は一瞬何が起きたのか分からず、ポカンと口を開いた。

遠く彼方に行きかけた思考を慌てて呼び戻し、目の前の惨劇に気付く。

「ま、窓が割れちゃった……」

「お前が早く玄関開けねーから……って違う！！ そんな事はどーでもいい！！」

「どうでもよくないっ！！ 住み始めて二日しか経ってないのに！！」

「

これは一体何の嫌がらせだ。いや、嫌がらせにしても程がある。

私は目の前の男を思い切り睨みつけた。

年の頃は私と同じか少し上に見える。褐色の肌と長い黒髪を持つその男は、やたらと尊大な態度で仁王立ちのまま私と向かい合っている。

おい、おまえは胸を張れるような事を何一つとしてしていないぞ。どうしてそんなに偉そうなんだ。

……。正直、関わりたくない。

「はあ…… ガラスの破片集めないと」

「おい」

「ラグが帰ってきたら直してもらえるけど……」

「無視するな！！ 梨乃、俺様に覚えはないのか！？」

覚え？ 人様の家に、窓ガラスを割ってまで突入してくるような俺様男に、覚えなんてあるもんか。 ていうか、勝手に人の名前を呼ぶんじゃない。知り合いだと思われたくない。

「生憎だけど、貴方のような人間と知り合いになった記憶もございませんし、覚えもございません。窓ガラスを割ったことは大目に見ますので、早くここから出て行って別のリノさんを探す事をおすすめします」

「い、いきなり他人行儀な言葉遣いはやめろっ」

お、地味にショックを受けている。……ちょっと面白いかも。内心でほくそ笑む私を横目に、男は大きな猫目を伏せて、悔しそうに拳を握る。

「俺様はなあ……お前に会うためだけに、こんな胸糞悪い街までわざわざ来たんだぞ……」

「ああ、それはご苦勞様でした」

「お前、本っ当に俺を覚えていないのか？」

「うん。全然、まったく、これっぽっちも」

一ミクロンほど覚えは無い。

男は呆然と私を見つめていたが、やがて気を取り直すと、咳払いをして再び胸を張った。だから、その無駄に偉そうな態度はやめなさいよ。無性に腹が立つぞ。

「ふん。いいだろう。そこまで言うなら俺様の名前を教えてやる」

いや、そこまで言うも何も、名前を教えて欲しいなんて一言も言っていないんだけど……。

「俺様はベルゼブ。最強にして最悪の、魔王様だ!!」

……。

……………アイタタター。

ただ滑り。ただ滑りだよ、その自己紹介。

私が言葉を失っているのを見て、男は——自称・魔王のベルゼブ君は、何を勘違いしたのか満足そうに笑った。

「フハハハ!! 恐ろしさに言葉も出ないようだな!!」

「うん……なんて言うか、その、別の意味で恐ろしいわ」

「そうだろう。俺様は恐ろしい魔王なんだ。どうだ、思い出したか、梨乃!!」

「うんうん、魔王ね、魔王。凄いなー怖いねー」

パチパチパチ、とやる気の無い拍手を送る。

「……お前、馬鹿にしてないか？」

「いや、別に？」

「視線を逸らすな。こっちを見て話せ」

「はいはい。で、その魔王様が一体何の用かな？」

「絶対馬鹿にしてるだろ!!」

いや、だってねえ……。

ベルゼブといえ、この世界では知らぬ者のいない悪名高き魔王の名前だ。

人の負の感情から生まれた魔王は、世界を闇の力で覆い恐怖の底へと陥れた。大地は疲弊し、人々から希望を奪い、全てを暗闇に染める。絶望の象徴ともいえる存在だった。

そんな魔王を打ち倒し、世界を救ったのが聖女と仲間達——私やラグといった、旅の一行だった。正確に言えば、倒したのではなく『封印』なのだが。

人に感情がある以上、それから生まれた魔王を完全に滅ぼす事は不可能だ。だから私達は、糧となる負の感情が届かない虚無の世界に、魔王を封じた。

——その筈だった。

「苦労したんだぜ。意識体だけを飛ばしたのはいいが、虚無の世界が深すぎてなかなか抜け出せないし。ようやくこの世界に戻って来れたと思ったら、今度は身体が無いし。仕方が無いから、適当なのを見繕ってとりついたらただけだな……まあ、人間にしては結構いい姿だろ？ちよつと若いけど」

黙々とガラスの破片を片付ける私の傍らで、聞いてもいない事をペラペラと喋っている自称・魔王。

彼の言葉の信憑性は、極めて高かった。だって、『虚無の世界』や『封印』のことは、私達旅の仲間とファルスのごく一部の王族しか知らない事だから。

民衆は、魔王を倒したという事実しか知らされていないのだ。

でも、にわかには信じられない。

彼からは、あの魔王から感じた禍々しさというものが、少しも見当たらない。しかも、この砕けた口調……。偉そうなことに変わりはないが、以前の魔王の言葉には、人を圧倒させる力があつた。

「なあ、ちゃんと聞いてる？」

「聞いてるよ。それでその魔王様が、一体私に何の用？ お礼参りに来たつてわけ？」

「よくぞ聞いてくれた！！」

うんざりして訊ねると、ベルゼブは嬉しそうに身を乗り出す。ともに会話をしたことがそんなに嬉しいのか？ 黒曜石にも似た大きな瞳を輝かせる姿を見て、犬みたいだな、なんて考えてしまった。こいつ……ちょっと可愛いじゃないか。

「今の姿でも悪くはないと思うんだけど、こいつ、魔力が全然無くてさー。ちょっと不便してるんだよな」

「へー、大変ね」

「そうそう、大変なんだよ。だからさ、復活させてほしいんだよね、俺様の事」

「は！？」

何を言っているんだ、こいつは。

この男が本物の魔王であれ偽者であれ、その頼みを聞くわけにはいかない。

「あのね……そんなこと、私がするわけないでしょ」

「何で？ あの墮落した世界に戻るんだぜ？ 最高じゃん！」

「一人で勝手に墮落してればいいじゃない。変な事に巻き込まない

でよ。大体、復活させる方法なんて無い——……」
「——あるんだな、これが」

ベルゼブはそう言うと、ニヤリと笑った。口元から、鋭い犬歯が覗く。

……なんか、嫌な予感。

そう思い、身構えたのも束の間。次の瞬間、私の身体は押し倒され、床に縫い付けられてしまった。

「聖女が闇に堕ちる時、封印の枷は解き放たれる。つまり——分かるよな？」

「……さっぱり分からないよ」

「気の強い女は好きだぜ、梨乃。……はつきり言ってやる。俺のものになれば、救世の聖女。再びこの世界を闇に染めようぜ」

第12話 絶体絶命、大ピンチ！？

「あのさ……」

「んあ？ 何だ？」

「女の子を口説くときは、もう少し優しくしないと嫌われるよ」

私を押し倒し馬乗りになっているベルゼブに、非難の視線を向ける。ベルゼブは私の言葉に一瞬目を丸くすると、楽しそうに笑った。

「ふん、言ってる。すぐにその減らず口を叩けないようにしてやるから」

「冗談、やめてよ。私は好きでもない男に抱かれるなんて、御免なのっ！！」

以前、ギアンにかましたのと同じように、足を振り上げる。くらえ必殺、渾身のミドルキック！！

見事にヒット——と思いきや、

「随分と生きがいいな。ま、その方が色々やり甲斐がある」

軽々と止められたばかりか、片腕でしっかりと足を固定されてしまった。

手首はしっかりとまとめ上げられているから、動けない。しかも馬乗り。足掻こうともがいても、男の力には勝てない。

まずい。非常にまずい。

脳裏にラグの姿が浮かぶ。

私の大切なひと。でも、彼は今、ここにいない。

「は、離して……ラグ以外の男に触られたくない」

「ラグ？」

「私の婚約者！！ あんただって知ってるでしょ。私と一緒に戦ってくれた魔術師」

私がそう答えると、ベルゼブの顔が途端に嫌悪感で歪む。

「はあ！？ お前、あんな奴と一緒になるつもりか！？ 趣味ワリ
ーな」

「あんな奴とは何よっ！！」

「……んで？」

「な、何？」

「奴とはもうやったのか？」

「うっ……。ま、まだ、だけど」

昨夜の出来事を思い出して、顔が熱くなる。そんな私を見下ろしたまま、ベルゼブはニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて、

「じゃあ、俺様が貰ってやるよ」

そう言うなり、私の首元に顔を埋めた。

肌が粟立つ。気持ち悪い。身体が動かないもどかしさと悔しさで、涙が零れそうになる。

絶体絶命の大ピンチ――。

「ラグ……っ！！」

この場にはいない恋人の名を呼ぶと、私はきつく瞳を閉じた。

——もうダメ!!

ラグを想い瞳を閉ざした瞬間、瞼の向こうに閃光が走った。
強い魔力の気配と、刺さるように鋭い怒気。部屋中に満ちた不穏な空気に、私は恐る恐る眼を開ける。

「梨乃!!」

聞こえてきたのは、待ち望んだ人の声。
いつの間にか解放されていた身体を起き上がらせて、彼の元へと走る。

「ラグ!!」

「大丈夫ですか？ 怪我は？」

「へ、平気……」

「あの男に何かされました？」

「まだ何も……ラグが来てくれたから」

ありがとう、とお礼を言うと、ラグはほっとしたように息をつく。
そのまま私を抱きしめて、優しく頬にキスを落とした。彼の香りに包まれて、心が落ち着いてゆく。

安心のあまりつい流れてしまった涙を、ラグがそっと拭ってくれた。

「どうして分かったの？　まだ仕事の時間だし、来られないかと思
っていたのに……」

「妙な胸騒ぎがしたので、慌てて飛び出してきたんですよ」

愛の力です。そんな事を言う彼に、思わず笑みがこぼれた。

「でも、本当にありがとう。ラグが来てくれなかったら、今頃……」

今頃、どうなっていたのか。ぞつとして、私は慌ててその考えを
払拭した。

そういえば、ベルゼブは？

振り返り部屋を見渡すと、壁際でグツタリとしている姿を見つけ
る。

ラグ、手加減無しで魔術を放ったんだろうな。ベルゼブは意識を
失っているようで、ピクリとも動かない。

……まさか、死んでないよ、ね？

不穏な考えを過ぎらせる私の横で、ラグはニツコリと笑って言っ
た。

「さて、あいつを縛り上げましょうね。これから先、梨乃に手を出
さないことを、身をもって誓って頂かなくては」

第13話 乱入者、退場

「一体どうしますか、この男。梨乃、指が欲しいですか？ それとも目玉？」

「どれも欲しくないよ!？」

目が眩みそうなほど極上の笑みを浮かべるラグだが、言っている事は物騒だ。薄々勘付いてはいたけど、サドっ気があるのかもしれない。少し——いや、かなり。

「では、ワラワヘムの魔女連中に差し出しましょうか？ いい実験

材料が来たといって喜んでくれますよ」

「わーっ、ダメダメ!!」

私は慌ててラグを引きとめた。何故、と怪訝そうに眉を顰める彼に、今までの経緯を説明する。

ベルゼブの話では、身体は借り物だということだ。それが本当なら、とり憑かれた人間に罪は無い。だから少し心配になったのだ。

魔王の復活。その話を聞いたラグも、私と同じ反応を見せた。信じられない、そう言いたげな表情を浮かべている。

「しかし……意識体だけの復活なら有り得なくは無い、と思います。意識体とは意志の強さによって作られるものですから。それに、虚無の世界を知っているということとは……」

「そうなんだよね……。でも、魔力は持っていないんでしょ？」

「ええ、そのようですね」

私の目の前には、いつの間にか手足を魔術で拘束されたベルゼブの姿。肉体は人間のものだ、というベルゼブの言葉に配慮して、ラグの『お仕置き』はひとまず回避させた。

「この人って、砂漠地帯の人かな？」

「恐らくそうでしょうね。この髪の色からすると、炎の部族ではなさそうですが……」

ファルスやエンデに、褐色の肌を持つ人間は生まれない。逆に、ここより遙か南にある砂漠地帯の人間達は、皆一様に肌の色は褐色だ。ラグの言う炎の部族とは、砂漠のオアシスに住む部族であり、燃えるような赤い髪をしている。旅の間も何かとお世話になった。

「懐かしいね。アリーシャ達、元気かな？ 久しぶりに会いたいけど……」

「そのうち便りを出しましょうか。アリーシャは今、イーラ国にいるのでしょうか？」

「うん、ヴァンの所にいるよ。少し前に結婚したって、手紙が来た」

「先を越されてしまいましたね」

「えへへ……」

炎の部族のアリーシャと、イーラ国の竜騎士ヴァンは、共に旅をした仲間だ。最後に二人と会ったのは半年前。私があゝ馬鹿王子と出会ったパーティー以来、顔を合わせていない。

アリーシャとは後宮に入ってから何度か手紙のやりとりをしていたが、現在エンデにいる事はまだ知らせていない。きつと驚かれるだろうな。

そんな思い出にひたっていると、ベルゼブが小さく呻き声を上げ

た。どうやら目を覚ましたようだ。

「おはようございます。気分はどうです？」

口調は柔らかいが、威圧的な態度でベルゼブの前に立ちはだかるラグ。

その一方で、ベルゼブは黒い瞳を丸くして、戸惑ったように視線を巡らせた。あれ？ 様子がおかしいぞ？

ラグもそれに気が付いたのか、形の良い眉を寄せた。

「あ、あの……ここは一体？」

恐る恐るといった様子で、ベルゼブが訊ねてくる。もしかして、精神の支配が解けたのか？

私とラグは顔を合わせて、ひそひそ声で話し合う。

「どう思う、ラグ」

「魔王にしては謙虚な態度ですね」

「何か、普通の人に戻ってるよね」

「油断はできませんが……少し様子を見ましょうか」

魔術では、人の精神に干渉することは禁忌とされているのだ。だから、この人の精神を覗き込むような事もできない。

私達は再びベルゼブに向き合うと、朝顔の観察でもするかのように、黙ってその姿を見つめた。妙な沈黙が流れる。

「だ、誰ですか、あなたたち？ 僕に何の用です？」

「いや、その……もしかして、何も覚えていない？」

「何がですか？」

ベルゼブはキヨトンとしたように首を傾げた。どう言えばいいの
か考えあぐねる私に代わり、ラグが説明役を買って出てくれた。

「貴方はおかしいな魔物に魅入られて、精神を操られていたんですよ」
「えっ!？」

「今の気分はどうです? 脱力感や破壊衝動などは感じませんか?」
「と、特には……」

聞くところによると、この人は砂漠地帯よりファルスへ出稼ぎに
来ていたらしい。数日前から記憶を失っていて、現在に至るという
訳だ。

あの魔王め、罪もない人間に迷惑ばかりかけやがって。

「それよりも、解放してくれませんか? 身動きが出来ないと、凄く
困るんですが……」

おずおずと、ベルゼブ(この人の本名ではないんだろうけど)が
訴えてくる。確かに、魔王がいなくなれば、この人を拘束してお
くのは可哀相かな。

ラグの視線に気付いて、私は小さく頷いた。そろそろ解放してあ
げよう。今回の事は不幸な出来事として、窓ガラスの件も勘弁する
ことにした。

私達の(寛大な)対処に、不幸な男は頭を下げた。それから、助
けて頂いたお礼です、と言いながら懷に手を忍ばす。

お礼? そんなもの、別にいいのに。

私がぼんやりと眺めていると、

「——梨乃!」

ラグが突然私を抱きかかえ、障壁の呪文を発動させた。

その一瞬後に、激しい爆発音。何だ？ 何が起きたんだ！？

部屋の中は黒煙で満ちて、視界が遮られる。その中で、「やーい、バーカ」とやたら勝ち誇る声が響いてきた。

お前は小学生か！！

「ふはははは！！油断したな！！俺様が簡単にくたばるわけないだろっ！！」

……あいつ、一芝居うちやがったのか。

私はラグに守られたまま、啞然としてしまった。曲がりなりにも魔王なら、妙にせせこましい手を使うな！！

「覚えていろよ、梨乃！！いつかお前を、その陰険魔術師から奪い取ってやるからな！！」

そんな捨て台詞を残すと、ベルゼブはこちらの視界が遮られている間に姿を消してしまう。

やがて黒煙が晴れ、残された私達は目を見合わせた。

「迂闊でした。爆発の呪文を封じた道具を持っていたとは……梨乃、怪我は？」

「大丈夫。大丈夫だけど……」

私は呆然として、滅茶苦茶になった部屋を見渡した。嵐の後の静けさ。そんな中に残されたのは、元はリビングの一部であった窓、壁、床の瓦礫たち。

住んで二日でリフォームか……。私はうんざりとして、大きなため息をついた。

「なんか……どっと疲れちゃった」

番外編 魔王ベルゼブの、ぶらり一人旅【その1】（前書き）

ベルゼブ君の馬鹿っぷりをご覧ください。

番外編 魔王ベルゼブの、ぶらり一人旅【その1】

よう。陳腐な世界の人間諸君。今日も元気に絶望してるか？

俺様はベルゼブ。泣く子も黙る魔王様だ。

……え、俺様を知らない？ そんなことを言う奴は、すぐに目玉をほじくってやる。今なら右目か左目、好きな方を選ばせてやろう。俺様は寛大な魔王様だからな。

突然だが、俺様は現在人を探している。

名前はリノ。ちんちくりんな女だ。

この世界では多分、救世の聖女サマで知られてるんじゃないの？
けっ、胸糞悪い話だぜ。

……え、何でそいつを探しているのかって？

それにはな、聞くと涙語るも涙の物語があるんだよ。

半年前、俺様は封印された。聖女と呼ばれる女——リノに。

少し油断してたんだよな。人間ごときに俺様が封印できる筈ない
だろうって。『若禿げの至り』ってやつ？

ちよつと世界を俺様色に染めたら、あいつ、虚無の世界なんて物
騒なところに俺様を封印しやがって。それで何とかそこから意識体
だけを抜け出させてこの世界に戻ってみたら、今度は身体が無くな
っててさ。

だから人間の身体を乗っ取って、人探ししてるってわけ。俺様を
完璧に復活させるためにな。

な、大変だろ？ 大変だと思うなら、その魂くれよ。墮落させて
やるからさ。

働いたら負けだと思う、って堂々と言える様な世界と一緒に作る
うぜ。

しかし……人間ってやつはどうにも面倒だな。

まずは言葉。俺達、魔に属するもの——つまり魔族は、上位に属するほど言葉が必要としなくなる。だから、魔族同士の会話は言葉を発しなくとも意思の疎通が出来るし、俺様ほどになれば他者の精神を操る事だって可能だ。ふふん、凄いだろ？

人間はそうもいかない。魔術にしたらってそうだ。

魔術師なんてモンにならなきゃ魔術は使えないし、精神を操る術は禁忌とされているからホイホイ使う事もできねえ。禁忌を犯して術を使えば、大抵の魔術師の肉体は負荷に耐えられず壊れちまう。

もっと酷い事に、人間の中には魔力を持たないやつもいる。そういうやつらは、魔力を入れる器が元々無いから、どうやって術は使えない。例えば魔力を付与しても、受け止めるものがないから流れ出してしまうのだ。

まったく、人間は本当にどうしようもない種族だ。

俺様が今入っている肉体は、そんな人間にしては中々に良い見た目をしている。

褐色の肌に引き締まった身体。たっぷりとした長い髪と瞳は、俺様の好きな黒色だ。闇の色を持つこの男の身体は、俺様の精神によく馴染む。馴染みすぎて、すっかり定着してしまったほどだ。

この男、心の中に相当な負の感情を持っていたんだろうな。

ふん、少し気に入ったぞ。

どれどれ、魔力の方はどうなんだ。これだけ俺様に馴染むんだ。使い物になってくれなきゃ困る。

俺様は意識を集中させて、術を組み上げる。頭の中に力の流れを思い浮かばせ、詠唱を始める。そうだな、まずは手始めに闇の魔術でもぶっ放すか。

それ！！

……。

………。

あれ？ 何で魔術が使えないんだ？

つか、魔力の流れがまったく感じられないんだけど……。

……おいイ！？

もしかしてこの男、魔力を持っていなかったのか！？

何でとり憑く前に気付かないんだ、俺！！ 馬鹿なのか？ いや、

馬鹿じゃない！！

おいおいおい、冗談じゃないぜ。

魔力無しの身体なんかに入っていていられるかよ。このフィット感の名残惜しいが、手放すしかなさそうだな。

俺様はさつさとこの男の中から出て行こうとして――。

「で、出られねえ……」

――そう。

俺様の精神は、この身体によく馴染んでいた。馴染みすぎていた。そして文字通り『定着』してしまったのである。

番外編 魔王ベルゼブの、ぶらり一人旅【その1】（後書き）

書いても読んでも疲れるベルゼブ君。

番外編『一人旅シリーズ』は、これからも彼の馬鹿っぷりを応援していきます。

第14話 すったもんだのその後に（前書き）

R15 注意。

第14話 すったもんだのその後

魔術というのは、色々面倒な制約があるとはいえ、基本的には便利なものだと思う。

例えば、何か壊れたものを直す時。これは無機物に限り、条件が揃っていれば、ほとんど元通りに戻すことができるらしい。その条件とは、術者が元通りの形を知っていること、そして修理対象の破片が全て揃っていること。この二つだ。

幸いな事に、私達の家のリビングはラグの魔術によって直すことが出来た。うん、やっぱり魔術って便利だよ。私には使えないから、余計にそう思うんだろうけど。

「すごいねえ、あつという間に直しちゃった」

「この程度なら簡単ですよ……ベルゼブが破片を持っていかなくて良かったです」

「ホントだね」

片付けも一段落して、リビングのソファに座るラグへ紅茶を運ぶ。そのまま隣に腰を下ろすと、私は彼に尋ねた。

「そういえば、仕事に戻らなくていいの？」

「大丈夫でしょう。師匠にだけは伝えてありますし」

「そっか……」

外はまだ明るく、日没までは時間もありそうだ。

せつかくだから、このままラグと買い物に行こうかな。一人より二人の方が、何かと楽しいし。

そう提案しようと口を開きかけ——、止めた。

ラグが、甘えるように私の肩にもたれかかってきたから。

右肩に、彼の頭が乗っている。絹のような銀系の髪が、サラサラと流れた。やっぱり綺麗、つい見惚れてしまう。

ラグの海を湛えた瞳が、私を見上げる。いつもとは違う、逆転した視線の高さ。

心臓がうるさいほど高鳴っている。彼に聞こえてしまうのではないか、と思うほど。

とびきり美形な男性——それも好きな相手に、扇情的な瞳で見つめられて冷静でいられるほど、私は大人じゃない。今だって、緊張のあまり身体が強張っている。

「梨乃……」

「は、はいっ」

「キス、してください」

「ひえ……!!」

まずい。変な声が喉から漏れてしまった。

ラグは、クク、と笑いを噛み殺すと、真っ赤になった私の頬に手を添えた。あ、ラグの手、ちょっと冷たくて気持ちいい。

そんな事をぼんやりと思いながら、ゆっくり顔を近づける。すぐ間近で絡まる、私達の視線——。

啄ばむような軽いキスをする、さらに深い場所へと誘われる。

「ん……」

「まだ足りません……もつと」
「あう……」

そんな艶っぽい顔、見せないでよ。
身体の奥が、じん、と痺れるのを感じる。こういうのって、欲情、
って言うのかな……。

「たまりませんね、その顔。私を誘っているんですか？」

恥ずかしさで固まっている私の耳元で、ラグが囁く。誘っている
のはそっちでしょう、言い返してやりたいけど、うまく言葉が出な
い。

どうしてだろう。ラグにキスをされると、自分が自分でなくなる
ような気がする。だって、言葉も視線も、言うことを聞いてくれな
い。これは私の身体なのに――。

ラグはもたれた身体を起こすと、私を一度胸元に引き寄せてから、
優しくソファに埋めた。

それからもう一度、深く長い口付けを交わして、すっかり力の抜
けた無防備な首に唇を寄せる。

「ま、まだ昼間だよ……それに、こんな所じゃ……」

「では寝室に行きましょうか？」

「やつ……そこで、喋らないで……」

「梨乃、答えないと続けますよ」

「んっ……」

ラグは意地の悪い笑みを浮かべながら、私を見つめている。青く
澄んだ瞳の奥に、炎が見えた。ラグもその熱に浮かされているんだ。
それがとても愛おしくて、嬉しくて、私は彼の頭を抱いた。銀色の

髪が、指に絡みつく。

……ああ、もう。どうにでもなれ。

流れるような仕草で、私のブラウスのボタンを外してゆくラグ。そしてその手が三つ目のボタンに差し掛かったとき、突然玄関のドアが叩かれた。

思わず、私達は顔を見合わせる。

「まさか、またアイツじゃ……？」

「多分違いますよ。ご近所の方じゃないですか？」

「じゃあ、出なくちゃ」

私は着衣の乱れを正すと、玄関へ向かうべく立ち上がろうとして――引き止められた。

「いいですよ、行かなくて」

「えっ？だって……」

「また私を生殺しにするつもりですか？」

「あ、ちよつと、ラグ……っ」

そんな事をやっている間にも、玄関のドアは叩かれ続ける。だが、暫くするとその音は鳴り止んで、一瞬の後にガチャ、と鍵の開く音が聞こえた。

え……鍵、開いちゃったの？

そう思ったのも束の間、騒がしい足音がこちらへと近付いてきて。気付いた時には、リビングの扉を思い切り開けられていた。

「ラグナっ、梨乃ちゃんは無事かぁ！？」

い。
空気を読まない養父の登場に、私とラグが固まったのも無理はな

第15話 突撃、実家の晩ごはん

「あらあら、それじゃあこの人ったら、勝手に魔術で鍵を開けて入ってしまったの？」

まったくいけない人ね。そう言って笑う目の前の女性は、しかしまったく『いけない』とは思ってもいない口振りで、アルバートさんを叱った。

「はっはっはっ。いやあ、ラグナが血相変えて飛び出して行くものだからね、つい心配になったんだよ」

色素の薄い茶色の髪を撫で付けながら、アルバートさんが笑う。

あの……こちらとしては笑い事で済まされないほど恥ずかしい事なんですけど。

アルバートさんから食事に誘われた私達は、現在揃ってラグの実家にお邪魔している。中世の雰囲気漂わせる無駄に広い部屋で、（これまた無駄に大きな）テーブル席に着き、すらりと並んだ食事を眺めている。

美味しそうな料理を前にした私の心はとても浮き足立っているのだが、隣に座るラグの表情は不機嫌極まりない。整った眉を顰めてテーブルの向こうでイチヤイチヤしている夫婦に、呆れた視線を送っていた。

「まあ、ラグナ。そんなお顔をしていると、男前が台無しですよ」

そう言ってラグをたしなめるのは、アルバートさんの隣で優しく

微笑むふくよかな女性、——ラグの養母であるマリベルさんだ。

「ああ、すいません。お二人があまりにも見せ付けてくれるので、ちよつと頭痛を感じていました」

「あらあら、まあまあ。照れるじゃないの、ラグナ」

「そうだぞ、親をからかつてはいけないぞ、ラグナ」

「はあ……まったく、本当に羨ましいご夫婦ですよ」

羨ましい、と言いながらも、ラグの表情は変わらない。それどころか、無理に笑顔を作っている為、さっきよりももっと引き攣って見えた。

まあ、無理も無いか。あんな場面を見られたんだし——。

——遡る事、数時間前。

「ラグナっ、梨乃ちゃんは無事かあゝ!？」

そんな叫び声と共にやって来たのは、ラグの養父であるアルバートさんだった。

薄茶色の髪の毛を乱し、ゼエゼエと息を切らして扉を開けたその姿を、私とラグは啞然と見つめた。

部屋中に流れたのは、何とも言えぬ微妙な空気。

その時の私は、きつとアホみたいに口をあけて、タコみたいに顔

を真っ赤にしていたことだろう。だって、見られてしまったんだから。

私とラグが、その……濃厚なキスを交わしている場面を。

彼の父親（兼師匠）にあんなイチャイチャシーンを見られるなんて、一体どんな羞恥プレイだ。

あの時の気まずさといったら、とんでもないものだった。しかもラグは本来ならば仕事をしている時間帯。のびきならない事情があったとはいえ、ちよつと申し訳なく思う。

アルバートさんは、若いつていいねえ、なんて笑っていたけど……。

思い出して、また羞恥心がむくむくと湧き上がる。誰か、誰か今すぐに穴を掘ってくれ！！そしてそのまま私を放り込んで、埋め立てて欲しい！！

ぐあー、と一人妙な声を上げて身悶える私の姿に、アルバートさんが首を傾げる。

「梨乃ちゃん、どうしたんだい？ はっ、まさか具合が悪いんじゃない……！！」

「えっ！？ ち、違います！！ その、美味しそうなお料理ばかりでたまらんなあ、と」

おい……『たまらん』ってなんだ、私。オッサンすぎるだろう。動揺しすぎておかしな言葉遣いを駆使する私に、それでも呆れることなくアルバートさんは笑って食事を勧めてくれた。

「遠慮しないで食べてくれ。こんな賑やかな食事は久しぶりだからね。なあ、マリベル」

「そうですね。でも、わたくしはアルと二人きりっていうのも、嫌いじゃありませんよ」

「ああつ、マリベル！！　僕も同じ気持ちだよー！！」

この夫婦、いつもこんなテンションで暮らしているんだろうか？
こんなにラブラブなら、私とラグのキスシーンなんてすぐに忘れてくれそうかな。

過ぎた事をいつまでも気にしていたらいけない。私は氣を取り直して、目の前の食事に手を付けた。

色とりどりの野菜を盛ったサラダに、クリームスープ、スパイスの効いた分厚いお肉と、魚介の蒸し物。大皿に載った料理はこれでもかというほど量が多い。食べきれないほどの料理を出すのは、客人に対して歓迎の意を表しているらしい。以前、ラグから聞いたことがある。

この異世界でテーブルマナーを気にするのは、王族が貴族だけだ。一皿一皿、ちまちまと出てくる料理など、上品を気取る権力者しか食べない。

短い間とはいえ後宮に入っていた私は、テーブルマナーを一通り覚えている。あの頃の食事は味気なかった。最高級の食材を使った、最高級の料理のはずなのに。

一人で食べる食事より、こうして皆でテーブルを囲みながら食べる食事のほうが、何倍も美味しい。比べ物にならないくらい。

温かな気持ちで満たされていくのを感じながら、私は黙々と料理を食べた。

隣から小さな笑い声が聞こえる。振り向いてみると、ラグの青い瞳と鉢合った。

「どうしたの？」

「幸せそうだな、と思ひまして」

「うん。すつごく幸せ。美味しいごはんもいっぱいあるし」

笑顔で彼に答えてから、ふと気付く。食い意地がはつてると思われたかな……。少しだけ心配になるけど、ラグは相変わらず穏やかな眼差しで私を見つめていた。

「貴女が幸せだと、私も嬉しいですよ」

「うっ……」

そんな甘い笑顔で、齒の浮くような台詞を言わないでよ……。！！
噛みかけの肉の塊を誤って飲んでしまった私は、慌てて水を飲み込む。

「まあ、あなた！！ラグナがあんなに優しい言葉を言うなんて……！！」

「うんうん。早く孫の顔が見たいねえ！！」

「ぶっ……！！」

そして聞こえてきたアルバートさん達の会話に、危うく水を噴出しかけるのであった。

第16話 貴方にまつわるエトセトラ

夕飯を終えた私は、マリベルさんに案内されてリビングへと移動していた。

なんとあの広い部屋は、食事をとるためだけに使われているらしい。凄い贅沢だ。私が住んでいた後宮の部屋並みだったというのに、だが、リビングはもっと凄かった。ここは何処のお城ですか？と思うほど。

家具や調度品は、一目見ただけでもアンティーク物だと分かるし、一際目を引く大きな暖炉には精巧な彫刻が施されている。けれども下品な豪華さではなく、嫌味のない上品さが漂う。

今夜は泊まっていきなさい、というアルバートさんの言葉に、私は甘える事にした。ラグは乗り気ではなかったみたいだけど、久しぶりの我が家だと聞いたので私がほぼ強制的に決めてしまったのだ。

お尻が沈むほどフカフカなソファに座り、マリベルさんが煎れてくれたお茶を飲む。すっきりとしたハーブティー。凄く美味しくて心がほっとする。

「お味はいかがかしら？」

「美味しいです。でも、ちょっと珍しい香りがします。このお茶、もしかしてマリベルさんが自分でブレンドしたんですか？」

「そうなの。わたくしのお茶を飲むと疲れが取れるって、アルが誉めてくださるから。ラグナも昔、よく飲んでいたのよ」

そう言って笑うマリベルさんは、とても可愛らしい。

ふくよかな頬をバラ色に染めて、幸せそうな顔をしている。こういう年齢の重ね方って素敵だな、なんてぼんやりと思う。

ラグはアルバートさんと仕事の話があるらしく、隣の書室に籠っている。今日の出来事も含め、色々と話しているのだろ。その為、現在私はマリベルさん——つまりラグのお母さんと二人きりなのだ。うん……流石に少し緊張しているかも。

マリベルさんは、アルバートさんよりも少し濃い茶色の髪の毛を結い上げて、上品でいながらもシンプルなドレスを着ている。

聞けば、上流貴族の出身らしい。なるほど、どうりで身のこなしも洗練されているわけだ。

驚いた事に、アルバートさんとは駆け落ち同然で結婚したという。その頃、まだ無名の魔術師であったアルバートさんとの結婚を、両親や一族に揃って反対されたので、逃げるようにエンデの街へやって来たと言うのだ。

情熱的だな……。まあ、私も人のことは言えないけれど。

マリベルさんの物腰の優しさと丁寧な言葉遣いは、ラグに通じるものがある。血は繋がっていなくとも、やはり親子なのだ。そんな事を考えていたら、少しだけ胸がチクリと痛んだ。

……お父さん、お母さん、元気かな。

故郷にいる家族を思い出して、心が沈む。

しかし、マリベルさんにそれを悟られないように、私は慌ててハーブティーを煽った。

「あの、もし良かったら、今度このハーブティーの作り方を教えてもらえますか？」

「ええ、喜んで」

「私、お料理はまだ全然ダメなんですけど、お茶だけは美味しいってラグが言ってくれるんです」

「あら。それじゃあ、一緒にお料理も作りましょう。わたくし、娘とお料理をするのが夢だったのよ」

「は、はい!!」

娘、というマリベルさんの言葉に、つい照れてしまう。

そうか……ラグの婚約者ってことは、そのうちお嫁さんになるわけで（当たり前だけど）、マリベルさんとも家族になるわけだ。

嫁と姑なんて言っと、お昼のドラマみたいなドロドロした関係を感じるけど、マリベルさんとなら上手にやっていけそうな気がする。爽やかな母娘関係が築けそうだ。

嬉しさで口元を綻ばせている私を、マリベルさんの優しい瞳が見つめている。深い緑の、しかしラグにどことなしか似た眼差し。

彼女は暫く黙ったまま私を見ていたが、やがてフワリと柔らかく笑うと、ゆっくりと話し始めた。

「貴女が、ラグナを変えてくれたのね……」

「え？」

私が、ラグを変えた？

不思議そうに首を傾げる私に向かい、マリベルさんは言葉を続ける。

「あの子は昔から優しい子だったけれど、どこか淡泊なところがあつたの。人との関わりを好まず、心を開けるような人間もいなかった。ラグナが孤児であったことは、聞いているかしら？」

「……はい。以前、彼から聞いたことが」

「あの子はね、本当の両親に捨てられた時の恐怖を、ずっと覚えていたの。また捨てられるんじゃないかって気持ちがある、あの子の奔放さを縛り付けていたのじゃないか。今度は捨てられないように、ちゃんという子にしているんだ——って、まだ子供だったラグナは言っていたわ」

……そうだったんだ。

初めて聞くラグの子供時代に、私は驚きを隠せなかった。ギユ、と両手を握り締めて、続きを待つ。

「人との関わりを持たないのも、いつか離れていってしまうから……。それなら、最初から関わらない方が楽だって。だからあの子はずっと淡泊なまま、笑う事も怒る事もしないで、大人になってしまった……」

幼い頃のラグが、そんな思いを抱いていたなんて。

確かに、出会った頃の彼は、何を考えているのか分からないくらい感情を見せなかったし、自らの事に関しては無口であった。それでも、旅を続けるうちに私達の心は近付いた。助け合って、笑い合っ

て、時には言い争って——そうして今、私達は一緒に生きている。出来る事なら、過去のラグに会って言ってやりたい。大丈夫だよ、って。貴方を愛してくれる人は、こんなにも沢山いるんだよ、って。苦しくなるくらい、抱きしめてあげたい。

「でも、今日あの子の顔を久しぶりに見て、とても安心したわ。だって、あんなに生き生きとした表情、はじめて見たから……。貴女の隣にいるラグナが、本当に幸せそうだったから」

「マリベルさん……」

言葉を無くしていると、彼女はまっすぐに私を見て、それから頭を下げた。

「あの子を……ラグナをよろしく願いしますね、梨乃さん」

第17話 遠き故郷ヲ想フ（前書き）

シリ阿斯パート

第17話 遠き故郷ヲ想フ

ラグナをよろしくお願いしますね、梨乃さん――。

マリベルさんからそう言われた後、私は思い切り泣き出してしまった。

涙だけが溢れるなら構わなかったんだけど、一緒に鼻水まで垂らしてしまい、マリベルさんが慌てて拭ってくれた。本当に子供みただ。

おかげで、高級ハンカチーフが一枚無駄になってしまった。
いや、誠に申し訳ない……。

こちらこそよろしくお願いします。

そう言いたかったのに、喉がしゃくりあげて言葉にならない。そんな私を見て、マリベルさんも少し涙目になっていた。

私は本当に幸せ者だ。

アルバートさんやマリベルさん、そしてラグ――。こんなにも優しい人達に、囲まれているんだから。

この事を、家族に伝えてあげたい。

お父さん、お母さん。あなた達が生んでくれた娘は、今こんなにも幸せです。だから心配しないで、って。

――私はその夜、遠い故郷にいる家族へと思いを馳せた。

私には、両親と兄、姉がいる。

大崎家の末っ子として生まれた私は、随分と甘やかされて育った。炊飯器や洗濯機の使い方も知らなかったし、わがままを言ってもすんなりと通った。根性無しの甘えん坊、それが以前の私だった。

だから、旅を始めた頃は本当に大変で。

風呂無しの野宿は当たり前だったし、食べ物だってまったく未知のものだから、食事すら億劫だった。

それでも、人間の適応力とは侮れない。二ヶ月も経つと、森に生える木の実や果物を平気で食べられるようになっていたし、仲間が動物を仕留めたときには喜んで干し肉を作り、皮や牙を売りに出し旅費を得ていた。

まったく遅しくなったものだ、と思う。生まれてこの方、キャンプもしたことの無かった私が、気付けば砂埃にまみれた立派な冒険者になっていたのだから。

今の私の姿を見て、家族は何を思うだろう。立派になった、と言ってくれるのだろうか。

私は故郷を捨て、家族を捨てた。この異世界を『選んだ』、と言えばまだ聞こえはいいのだろうが、つまりはそういう事なのだ、と思っている。

家族は心の中にいる。たとえどれだけ離れていて——もう会えないのだとしても。でも、それは私のエゴだ。自己勝手な解釈でしかなく、そして残された家族にとっては辛く悲しい事ではない。

それを知っていながら、今の私はこの世界を選んだことを後悔していない。時々、少し寂しくなるけれど、その感情も私が掴んだものだから。

それでも一つだけ……たった一つだけ、心残りがあった――。

涙と鼻水でグシヨグシヨになった私は、そのまま風呂を借りて綺麗さっぱりと洗い流した。

気を抜くと、また泣き出しそうになるけど、温かな湯に浸かっているうちに落ち着くことができた。

マリベルさんに案内された客室へ向かうと、そこには既にラグの姿があり、ベッドに腰掛けながら分厚い魔術書を読み耽っていた。私の気配に気付いたラグは、静かに顔を上げる。それから自分の隣をポンポンと叩いた。隣へおいで、と言っているようだ。

断る理由もないので、それに従いベッドに座る。すると、ラグは私の顔を見つめて、頬を軽くつねった。

「やめろよー。ほった取れちゃうだろー」

「……泣き止んだみたいですね」

「え？」

「母から聞きました。貴女が泣き出して大変だったと、笑っていましたよ」

「うっ……」

マリベルさん、ラグに話したのか……。なんだか少し恥ずかしいな。

私が所在なさげにもじもじしているその横で、ラグは再び魔術書を手に取った。ページを開き、また読書に耽るのかと思いきや、どこか神妙な面持ちで本を閉じてしまう。

何かを言いよんでいる。それを感じて、私はラグを見上げた。

「……いいのですか？」

「何が？」

「師匠——いえ、父や母は、貴女のことを娘だと思っています。しかし貴女にとつての両親は、故郷にいる方達だけでしょう？ 娘として扱われる事に、抵抗はありませんか？」

ラグ、そんなことを考えていたんだ。

珍しく言葉を選びながら話す彼の姿に、愛おしさが湧き上がる。

ラグは、私を故郷から切り離したことに對して、申し訳ないという気持ちを抱いている。そして、私の家族に對しても——。

だからこうして、私の気持ちを量ってくれたのだ。

私はラグの肩にもたれかかると、小さく息をついた。落ち着く場所だ。今の私にとって、一番大切な居場所。

「ラグ……私ね、凄く嬉しいんだ」

大きな手が、私の髪を撫でる。

「だって、ラグのことを大切に思ってくれる人達と家族になれるんだよ。この世界では、もう得られないものだと思っていたのに。アルバートさんやマリベルさんに娘だと思ってもらえることも——ラ

グのお嫁さんになれることも、本当に嬉しい」

「梨乃……」

ラグの腕が、私を包み込む。優しい香りが胸いっぱいに広がって、くらくらする。心臓が高鳴って、全身で彼への想いを叫んでいる。ラグ……私の大好きなひと。本当に、本当に大好き。

「私は絶対ラグを離さないから。だから、ラグこそ覚悟してよね。お料理も頑張るし、良いお嫁さんになるから……私を離さないでね」「望むところです」

私達は小さく笑い合って、そしてゆっくりと唇を重ねた。二人だけの、誓いのキス。お互いが離れないように、何度も確かめ合いながら。

「……此処が実家でなければ、今すぐに貴女を抱きたいのですがね」「えっ？」

「どこで聞き耳を立てられているか、分かったものじゃないですか」「ら」

「あは、そうだね」

そうしてまた、私達は笑う。こうしてずっと幸せに暮らそう。どんな日常だって、それが私達の道になるのだから。

お父さん、お母さん。

お兄ちゃん、お姉ちゃん。

私、この世界でお嫁に行きます。

今まで育ててくれて、本当にありがとう。そして、親不孝な娘でごめんなさい。

私の大切なひと——ラグを紹介できないこと。それが私の、唯一の心残りです。

第18話 私の心は貴方色

ラグの実家で朝食をいただいた後、私達は我が家へと帰ることにした。

アルバートさんやマリベルさんは、もう少しゆっくりしていけばいいのに、と言ってくれたけど、住んで早々家を空けるのもしのびない。残念そうに見送る二人にお礼を告げて、私とラグは晴れた空の下家路に行く。

「あつという間の里帰りだったね」

「里帰りと言っても、同じエンデですよ。師匠に至ってはワラワハムで顔を合わせていますし」

「でも嬉しそうだったよ。アルバートさんもマリベルさんも」

今度は家に呼ぼうね、そう言って笑いかけると、渋々ながらも了解してくれた。

「じゃあ頑張ってお料理覚えないと。あ、今度ねえ、マリベルさんがお料理教えてくれるって。ラグの好きなもの、いっぱい覚えるからね！」

「楽しみにしていますよ。しかし、まずは卵をきちんと割る練習からはじめないと」

「うつ……あれは偶然入っただけだもん!!」

「はいはい」

「返事は一回!!」

いつも通りの賑やかなやりとりを交わしながら、美しいエンデの

街を歩く。

エンデの白を几帳とした街並みは、あちこちに通る水路の水と相まって、見事な風景を作り出す。本当に、おとぎ話の世界だ。

ラグは、今日一日仕事を休んでいる。

ベルゼブの話を聞いたアルバートさんからも、私の側に付いているように言われているらしい。気を使わせて申し訳ないが、やっぱり頼ましい。だって、あんな面倒なやつ、私一人で相手にするのは色々辛いものがあるから。

「あ、そういえば、市場に行きたかったんだ。ラグ、このまま寄っていいよ」

「構いませんよ」

市場は街の中心部に並んでいる。魔術師協会の建物からは、ほんの少ししか離れていない。

所狭しと色とりどりのテントが張られ、商人や街の人で賑わっている。売っている物も様々で、冒険者用の武器や防具を扱う店もあれば、新鮮な果物や野菜を売る店もある。骨董品を並べているテナムトには、あきらかに呪いの掛かっていそうな趣味の悪い魔術具が置いてあり、物珍しそうに眺める私にラグの声が掛かる。

「手を触れてはいけませんからね」

「分かっているよ。魔術関係のものには手を出さないって決めてるから」

「いい心がけです」

私は以前、こうした魔術具によってとんでもない悲劇に見舞われたことがある。まだこの世界に来て間もない頃だ。あまり気持ちのいい出来事ではなかったので割愛させていただくが、とにかく、そ

れ以来魔術関係の品物には迂闊に近付かないようにしている。

ピレツツアと調味料用のハーブ、それから腐らせない程度の野菜と果物、不足していた日用品を買い込むと、ラグの手はあつという間に荷物で埋まる。

後は衣服類を買えば、本日の買い物は終了だ。

市場にある衣類は、旅用に作られたものか魔術師用の古びたローブしかないので、少し離れた大通りまで行かなければならない。そこならば、普段から着られるような、上質の品物が置いてある。

明け透けに言ってしまったえば、私達はお金には困っていない。

ラグは城に召されていた時のお給金をほとんど使っておらず、私に至っては王子から貰ったドレスや宝石を売り払ったお金がある。

この世界には、マンガもなければCDやDVDも無い。さして欲しいものなどないから、こうした買い物の際にしかお金を使うことはない。

ただ、洋服だけはみずばらしいものを着るわけにはいかない。旅をしていた頃と違い、多少なりとも身なりにも気を使わなければならなかった。私の恥は、イコールでラグへと繋がってしまう。せめて他人に見られる部分は、しっかりとしなければ。

大通り沿いには、様々な衣服の仕立屋が並んでいた。多いのはやはり魔術師のローブを作る仕立屋だ。エンデに住むのはほとんどが魔術師だと聞いていたが、なるほど、道行く人々も大体ラグと似たような格好をしている。

その中でも、ラグが一番かっこいいけど……これはひっそりと心の中に留めておく。

それぞれの店先には、その店舗の新作やら流行の商品やらが置かれている。まさか異世界に来てウィンドウショッピングができると

は思わなかった。なかなか面白い。

目的も忘れてあれこれ見て回っていると、隣を歩いていたラグが呆れてため息をついた。

やばい。ラグに荷物を持たせているのに、そっちのけで楽しんでしまった……。

「ご、ごめんラグ。荷物、重いよね。半分持つから」

「荷物は大丈夫ですが……貴女、自分の洋服を買いに来たのでしょうか？ さつきから、魔術師のローブばかり見ているじゃありませんか」

「え!？」

言われて見れば、確かにそうだ。

多分、無意識のうちに覚えてしまっただろう。あの色はラグに似合いそう、あの形は好きかな……とか。

何だか、いつもラグのことばかり考えているな。そう思うと途端に恥ずかしくなって、一人で勝手に照れてしまった。

「貴女にローブは似合いませんよ。どうしても着てみたいなら、後で私のを貸しますから」

「いやあ、そうじゃないんだけど……」

……まあ、いいか。

私は気を取り直すと、今度は自分の洋服を見るために大通りを進むのであった。

第19話 夢のドレスと乙女の悩み

女性の買い物に男性が振り回されるというのは、どこの世界でも同じらしい。

あれから私は様々な仕立屋をまわり、長々と品物を見定め、ようやく経って満足な買い物をする事ができた。

控えめなデザインのワンピースを数点と、ブラウスやスカート、それにちょっとした羽織もの。

ファルスやエンデには四季がなく、一年中同じ気候だ。時々肌寒くなるけれど、大抵は少し温かな春の日ほどの気温だ。暑くもなく、寒くもない、過ごしやすい日が続く。だから、故郷に住んでいた頃のように、季節ごとに服装を変える必要はない。

楽と言えば楽なのだが、昔のようなオシャレが出来ないのは寂しくもある。

ミニスカートやジーンズが恋しくなる時もあるが、この世界の標準的な女性の服装は、ドレスであったりワンピースであったり、脚が膝下まで隠れるようなスカートが主流だ。

唯一私が持っているミニスカートは、この世界へやって来た時にはいていた制服だ。もう一度着てみたいが、女性が安々と脚を見せたいけません——なんてお小言がくるに違いない。

夏休み初日に異世界へ召喚された私が、何故制服を着ていたのか……。それは、補習という名の、非人道的指導があったからなのである——

……威張って公言できるものではないけどね。

「お待たせ、ラグ。色々付き合わせちゃってゴメンね」

店の外で待つていたラグに声を掛けると、彼は黙ったまま私を手招きした。

隣の店を見ているみたいだけれど、何があるのだろう。彼の隣に並んで、ひょいと店内を覗く。そこで私は、思わず感嘆の声をあげてしまった。

「ほあー……凄いドレス」

その店は、ドレス専門の仕立屋だった。並ぶのは、見事な純白のドレスばかり。

もしかしてこれは……乙女の憧れ、ウェディングドレス!?

「結婚式用のドレスですね」

「凄い綺麗。ていうか……こっちの世界でもお嫁さんのドレスは白なんだあ」

「白は清純さを表す色ですからね。花嫁が着るには、一番似合いの色なのでしょ」

私達の目の前に飾られているのは、レース飾りをふんだんに使い、大きなコサージュを胸元にあしらった高級感溢れるドレスだ。キュ、と絞られた腰元から、ふわりと広がるスカート部分にかけて、真珠にも似た宝石が散りばめられていて、淡い光を放っている。

「女の子の憧れだよなあ……着てみたいなあ」

ただ漏れになった心の声に、私は慌てて口を噤んだ。

しかし、いくら口を閉ざしたところで、隣のラグには丸聞こえだ

つたらしい。彼はニツコリと笑顔を見せると、私の耳元で甘い声を囁く。

「貴女の花嫁姿はさぞ美しいでしょうね。私としては、それを脱がせる方が楽しみですけど」

ひー！！こんな街中で無駄に色気を出すなー！！

「あ、あのねラグ、昼間から脱がせるとか言わないでっ！！」

叫んでから、ここが店先だということに気が付く。

店の人が怪訝な顔でこちらを見ていたので、私は顔を茹で上がらせたまま、ラグの袖を引っ張りその場を後にした。

その日の夜。

私は洗面所の鏡の前に立って、無駄に妙な姿勢をとって自分の姿を眺めていた。

言っておくと、そういう趣味を持っているわけではないぞ。ナルシストなわけでもない。

ただ、昼間あのドレスを見た時から、気になっていたのだ。

その……最近、ちよつと太ったかなー、なんて。

旅をしていた頃は、毎日歩き詰めだったこともあり、適度な体型

を保っていた。筋肉だつてちょうどいい程度に付いていたし、それなりにスレンダーではあった。

後宮にいた頃は、補正下着もびっくりな締め付け具合の（もはや拷問に近い）コルセットを付けていたので、身体にフィットするドレスを着ても気にならなかった。

しかし、最近はおろくな運動もしていないし、昨夜はアルバートさん宅で豪華な夕食を頂いてしまった。

服を着てしまえば分からない程度だが、しかし……ちょっとたるんできているような気がしなくもない。

ラグと婚約しているとはいえ、まだ式の日取りなど詳しい事は決めていない。だが、いつかは純白のドレスを着るときがやって来る。その時に、もし体型が崩れてしまっていたら――。

「まずいなー……やっぱり運動しないとダメだよね……」

呟きながら、ブラウスを胸まで上げて腹の肉をつまむ。プヨ、とした感触。これは確実に筋肉が衰えている証拠だ。ううむ、これはマズイかもしれない。

それにしても、何でこの肉が胸に回らないんだ。私の胸は貧乳とまではいかなくとも、大きいと言えるわけでもない。中途半端だ。理不尽だ。どうしてこの世には胸の大きな人と小さな人がいるんだ。皆同じ大きさにしてくれれば、悲しい思いをすることなんてないのに――！！

「お前、もうちょっと頑張って大きくなれよー。ほら、イチチニ、イチチニ……」

サボテンだって優しい言葉をかけてやれば綺麗な花を咲かせるんだ。私の胸もこうして応援してやれば、きっと大きくなるに違いない。サボテンにできて私にできないことなんてない。

一人で自分の胸を揉み……もとい、マッサージしながら、ブツブツと話しかける。他人が見たら、頭の可哀相な女だと思われるだろう。しかし、私は至って真剣だ。真剣に、自分の体型の半端さを嘆いているのだ。どうか暖かく見守って欲しい！！

「うむ。今日の体型確認は終了である！！諸君、これからも共に頑張ろうではないか！！」

ついテンションが上がってしまい、私は鬼軍曹の如く鏡の中の自分へと敬礼し——、その向こう側で腹を抱えて蹲るラグの姿を見つ、卒倒しかけた。

「あ、あの……えっと、いつから……？」

「貴女が妙な掛け声を言いながら、胸を触っていたところからです」

「み、見てた……よね……？」

「それはもう、ばっちり」

……う、うわあああああ嘘だろおおおお！！？

次の瞬間、私はこの世のものとは思えない悲鳴を上げ、寝室のクローゼットに閉じこもる羽目となった。

番外編 クリスマス特別編【異世界珍百景・パート1】（前書き）

異世界の珍妙クリスマス。

番外編 クリスマス特別編【異世界珍百景・パート1】

クリスマス——。

それは、世界中の人達を虜にする、魅惑のイベント。

煌々と輝くイルミネーション、心が躍るツリーの飾りつけ、甘い
ケーキと七面鳥、恋人はサンタクロース……。

ああ、なんて楽しいクリスマス。

それなのに……それなのに何故っ！！ この世界にはクリスマス
が存在しないんだっ！！

——そんな心の声は、ただ漏れだっただけ。テーブルを叩いて
叫ぶ私を見て、ラグは整った眉を顰め呆れたように息をついた。

「突然何を言い出すんです、貴女は」

「ラグ……あと少しでクリスマスだよ！？ 一大イベントだよ！？」
「はい？」

首を傾げるラグに向かって、私は手作りカレンダーもどき突き
つけた。

これは、異世界の暦に慣れない私が自ら作っているものだ。多少

（いや、かなり？）のズレがあるとはいえ、中々に役立っている。ちなみに、曜日は必要ないと思われたので記入していない。

そのカレンダーもどきの、『12/25』の日付に、大きな赤文字で『クリスマス』と書かれているのを見て、ラグは私に言った。

「私にそちらの世界の文字は読めませんよ」

「だから、クリスマスだってば」

「クリスマスとは？」

「私の世界の偉い人の誕生日！！ 皆でお祝いするの！！」

色々と説明を抜かしてしまったけど、間違った事は言っていない……はず。

私の家は仏教信仰だったが、熱心な信仰者ではなかった。むしろ無宗教に近い。日本人って、多分そこまで宗教に縛られていないから、クリスマスに何の意味があるうとも楽しめるんだと思っている。まあ、私の勝手な推測だけれど。

ラグは私の突き出したカレンダーもどきを見つめると、考え込むように黙ってしまう。

どうしたんだろう、と不思議に思っていると、

「ああ、その日なら、こちらの世界にも記念日がありますよ」

そう言って、ニッコリと笑う。

「えっ、ホントに！？ なになに、何の記念日！？」

「大賢者リユーカーンの『悲劇の落日』が、丁度この日にあたりますね」

「……それって」

「大賢者リユーカーンが塔から落ちて亡くなられた日です」

身を乗り出してラグに問い詰めていた私は、思い切り肩を落とす。違う。何か違う。クリスマスって、もっとう……夢があるものでしょ。

ため息をつきながらテーブルに伏した私を見て、ラグは理解不能と言いたげな表情を浮かべた。

「何故、その人間の為にわざわざお祝いをするのです？ 知り合いではないのでしょうか？」

「いや、私の場合はその人を祝うのがメインってわけじゃないんだけどね……」

「どういうことですか？」

「んー……お祝いにかこつけて皆で騒げればハッピー、みたいな」
「なるほど……」

あ、ラグ、今呆れたな。

人を小馬鹿にするような微笑をするのはやめろよ！。

「悲劇の落日には、ワラワヘムでもお祭りがありますよ。行ってみますか？」

「お祭りって……命日なの？」

「はい。リユーカーンの降霊祭ですが」

「こ、こうれいさい……」

その言葉だけでも、楽しいお祭りではない事が何となく予想できる。まったく心が躍らない。

いや、もしかしたら案外賑やかだったりして。異世界には異世界なりに、死者を悼む為の楽しい祭りがあるのかもしれない。

何事も前向きに考えなければ。異文化交流って大切だよね、うん。

「その交霊祭って、いつも何してるの？」

「そうですね……まずは魔女達が『青月の鮮血事件』で犠牲になった魂を呼び戻し、塔の中へと招きます。そうする事で塔はぼんやりと輝き、リユーカーンの墓標となるのです」

ああ。あれだよな。イルミネーション的なものだよね。何か不穏な単語があったのは気にしないことにするよ。

「それから、呪術用の生贄を壁中に吊るして——」

……ツリーの飾り付け的なアレね。

「瞑想状態にするための秘薬を大釜で煮込み、参加者に配ります」

………分かってる！！シャンパンだよな、うん！！

「最後に塔の周りを皆で囲んで、交霊の呪文を唱えれば、リユーカーンとの魂の交流が可能になります」

………。

私の前向きな脳内変換機能があっても、流石に無理がありすぎるわ！！

ていうか違う、根本的に間違っている。私が望むクリスマスは、そんな呪術的なモンじゃない！！

あやしい薬を飲んで、あやしげな呪文を唱える、あやし過ぎるお祭りなんて絶対に嫌だ！！

「私は参加した事はないのですが、梨乃が行きたいのであれば——」

おや、どうしました？」

がつくりと頂垂れた私の姿に、ラグは不思議そうに小首を傾げた。
うん。なんて言うか、その……。

「……いいよ。その話を聞いて十分楽しめたから」

番外編 クリスマス特別編【異世界珍百景・パート1】（後書き）

『青月の鮮血事件』……嫌な事件だったね。的な出来事です。
そのうち童話集に書きたいなあ。

番外編 お正月特別編【異世界珍百景・パート2】（前書き）

異文化交流その2。

番外編 お正月特別編【異世界珍百景・パート2】

「もーいーくつねーると、おしょおーがつう、ヘイ!!」
「……何ですか、その奇妙な歌は」

麗らかな日差しが差し込むリビングで、気持ちよく歌いながら掃除をしていると、いつの間にか現れたラグが怪訝な瞳で私を見つめていた。

自室（彼には魔術研究用の小部屋があるのだ）に閉じこもっていたから、つい油断していた。ち、ちくしょう!! 私之音痴な歌声を聞かれるとは……!!

箒を手にとってエアギターを奏でていた（これも掃除の一環だ!!）私の横を無言で通り過ぎて、ラグはため息をつきながらソファに座った。それからこちらを見て、やれやれ、と言った雰囲気を感じるともせずに首を振る。

そ、そんな目で人を見るなー!!

言いたいことは分かるから、今は何も言ってくれな。自分だってちゃんと理解している。某未来の猫型ロボットアニメに出てくるガキ大将なみのボエな歌声だって事は!!

「気持ち良さそうで何よりです。 balan mos に似た素晴らしい歌声ですよ」

「う、うるさいっ!!」

ほーら、やっぱり言われた。

『バランモス』とは、この世界に住む魔獣である。強靱な体を持つ四本足の獣で、信じられないほど強暴だ。以前、旅の途中に運悪く遭遇した事があるが、ラグの素早い判断により逃げる事が出来た。あの生き物は、かなり衝撃的だった。

ちなみに、鳴き声は牛の雄叫びを何百倍にも激しくした感じ。

『ブモオオオオ!!』みたいなの……ってオイ!! 『ボエ』よりも酷いじゃないか!! 確かに私は音痴だけど、そこまで酷くないぞ!?

ムツとして唇を尖らせると、ラグは耐え切れずに小さく笑っている。

くそう……。悔しいのに、その笑顔が眩しすぎて絆されちゃうんだぜ……。!!

掃除を一時中断して、ラグに紅茶を煎れる。それを手渡ししながら隣に座ると、ラグが首を傾げて訊ねてきた。

「今のは、貴女の世界の歌ですよね?」

「そうだよ。お正月の歌」

「オシヨウガツ?」

「新年を迎えて、一番初めの日のこと」

こちらの世界は私のいた世界に比べて一年が短いらしい。

暦の話聞いたことはあるが、生憎私の頭では覚え切れなかった。だから、自分でカレンダーを作ってそれを見て生活している。

カレンダーもどきによると、現在は12月29日。この世界では関係ないけれど、もう幾日でお正月だ。

折角だから大掃除しようと思気込んで、いつの間にか一人エアギター大会を開催してしまった。うん、どうしようもないな、私は。

「一年の始まり、ということですか」

「そうそう。懐かしいなあ、初詣にもよく行ったっけ……」

「ハツモウデとは？」

「これからもヨロシク、って神様をお願いするの」

「神頼みの日なんですか？」

「そういうわけじゃないけど……」

うーん、何と説明するべきか。

そもそも、この世界には新年を大々的に祝う習慣はない。王国設立何周年だとか、誕生日の概念はあるらしいのだが、新年がどの月の何日になるのか分からないのだそうだ。結構アバウトな世界だ。

しかし、ラグは私の説明など聞かなくとも、勝手に解釈して理解したようだ。興味深い、と呟くと、他にも何をするのかと訊ねてきた。

「他に？ うーん……家族が集まってご馳走を食べたり、お餅を食べたり、ミカン食べたり……」

「食べる事ばかりですね」

「あとはねえ、そうそう、お年玉を貰うの……」

「オトシダマ？ 落とした玉を貰うんですか？」

「違うよ。お年玉っていうのは、子供が大人からお金を貰うことだよ」

ラグは暫く黙ったまま私を見つめていたが、やがて小さく頷くと、

「神に身の安全をお願いして、食べ物をつらふく食べて、子供がお金をせびる日——ということですか」

「……間違っではないね」

「成程。よく分からない祝日だということは、理解できました」
「……うん。私も、よく分からなくなってきたよ……」

こうして、私達の異文化交流は進んでゆく。

もう幾つ寝るとお正月。

そして来年もまた、同じような会話を繰り返すのだろう。

番外編 お正月特別編【異世界珍百景・パート2】（後書き）

次のイベントは節分か？

第20話 私と義母と謎の竜

料理のレパトリーが僅かに増え、私達の食卓事情が潤いはじめた頃。

その日も、いつものように二人で朝食をとっていると、ラグが思い出したように手を打った。

「そうだ。今度、梨乃に紹介したい人がいます」

「え？ 紹介したい人？」

思ってもみなかった言葉に、私はつい鸚鵡返しで訊ねてしまう。

ラグが誰かを紹介したいだなんて、珍しい事もあるのだな。もしかして、友達だろうか。首を傾げる私に、ラグはにこやかな笑みを向けた。

「明後日あたりにはエンデに到着する予定ですので、折をみて会わせますよ」

「分かった。家に連れてくるの？」

「そうですね……夕食くらいは、一緒にとりましようか？」

「うん。それじゃあ、今日も頑張ってお料理覚えてくるね」

ラグの知り合いかあ……どんな人なんだろう。

私は彼の笑顔に絆されて、楽しみにしている、と頷いた。
これから起こる騒動など、まったく知らない暢気さで――。

マリベルさんから料理を教わる為に、私は三日おきごとにラグの実家へと通っている。

最初に覚えた料理は、ラグが好きだと言うペリネ（私の世界で言うパスタ）を使ったものだ。これは、ソースさえ覚えれば色々な味が楽しめる。魚介類をふんだんに使用したトマト風味のソースと、ベーコンもどきの入ったクリームソース。チーズと半熟卵を加えれば、カルボナーラにちよつと似ている。

次に覚えたのは、魚と野菜の蒸し物。これは比較的簡単で、ハーブとスパイスの量さえ間違えなければ、大抵は成功する。ラグも私も、肉より魚の方が好きなので、このレシピは重宝することになりそうだ。

今日は米によく似た穀物、パンヤを使った料理を覚えてくれるらしい。

だが、材料に不足があった為、私はマリベルさんと共に市場へと買い物にやって来ているのだ。

「あら、見て見て梨乃さん。あのペンダント可愛いと思わない？」
「わーっ！！ダメですよ、マリベルさん。あれ魔術具ですよ！！」
「こっちの指輪も素敵ねえ。黒い宝石が付いてるわ」
「それもダメです！！見るからにヤバそうなデザインじゃないですか！！」

そう、市場へ材料を買出しに来ている——筈なのだが。
マリベルさんは市場へ来る事が滅多に無いようで、先程から色々なテントを見て回っては、歓喜の声を上げている。普段の買い物は

どうしているのか訊ねると、家にやって来るお抱え商人の移動店舗から直接買っているらしい。

それにしても、やたらと魔術関係の道具に興味を示している。アルバートさんの影響なのだろうか。

彼女は私と同じように魔力を持たない人間なので、迂闊に魔術具に触れることは出来ない。私は言語疎通の為の指輪をしているが、これはラグ特製の安全保障付きであるから危険はない。だが、このような市場で売られているものは、以前の持ち主やその効力が分からないものも多い。関わって妙な呪いでも貰ったら、一大事だ。

名残惜しそうにしている彼女の手を引いて、食料の並ぶテントへと向かう。

買う物はそう多くない。早く済ませて、マリベルさん宅へ帰ろう。

市場へ来て小一時間ほどしか経っていないのに、やけに疲れてしまった。げっそりと肩を落とす私に手を引かれたマリベルさんは、それでもまだ楽しそうに視線を巡らせている。

「あら……？」

ふと、マリベルさんが立ち止まった。

「どうしました？」

その様子に、私も足を止める。

彼女の指先が空を指した。ざわざわと辺りが騒がしくなり、道行く人々も天を仰いでいた。

一体どうしたのだろう？ 怪訝に思いながら、私も空を見上げる。

白い雲が浮かぶ青空。

そこに見える一点の影。その影は徐々に大きくなり、明確な姿を現す。大気を響かせる、力強い羽音。

長い首に、黄金の鱗を纏った体、そしてその背には一対の翼――。

「ドラゴンだ!!」

誰かが叫ぶ。

それを皮切りに、市場は騒然となった。

混乱した人々が、いつせいに市場から逃げ出す。

ドラゴンは商人たちの休憩所となっている広場へ降り立つと、黄金の巨体を震わせ、凄まじい咆哮を上げた。鼓膜が震える。凄い声だ。

マリベルさんは、ほんの先に見えるドラゴンの姿をまじまじと眺めていた。その瞳は、恐怖よりも好奇心で溢れている。なんと一度胸の持ち主だろう。つい感心してしまうが、今はそれどころではない事に気付いて私は彼女の背中を押した。

「早く逃げましょう、マリベルさん!!」

「あつ、梨乃さん、ちょっと待って……」

「待てません!! 相手はドラゴンですよ!？」

既に、私達の周りに人の姿は無い。がらんどうになったテントの屋根だけが、ハタハタと頼りない音を立てて靡いている。

この街には魔術師が多いはずなのに、誰一人としてドラゴンに立ち向かう気がないらしい。逃げ足だけは速い彼らに向かって、つい叫びたくなる。すっかりしる魔術師！　と。

ドラゴンは私達の姿に気が付くと、美しく鋭い緑の瞳を細めた。途端に立ち昇る殺気。

背筋に、いやな冷汗が流れた。

あいつ……私を狙っているな。

旅の間に鍛えられたのは、体力だけではない。敵の動作や気配を察知する観察眼も、十分に備わった。だから、何となく分かってしまっただ。目の前の敵が、誰を狙って、何を仕掛けてくるのか。

現に、このドラゴンは私だけを視界に捉えている。その瞳から読み取れるものは――怒りと殺気。

恨みを買った覚えはないが、救世の聖女という立場上、私には敵が多い。

以前に壊滅させた邪教崇拜組織の残党が、それともベルゼブの手先の者か。思い当たる節は多々ある。

何にせよ、これはまずい。せめて、マリベルさんだけでも逃がさないと……。

「マリベルさん……あいつの狙いは、多分私です。私が引き付けますから、その間に逃げて下さい」

「待つて、梨乃さん。違っの、あの子は……」

早く逃げるよう促す私に、しかしマリベルさんはそう言うと、ドラゴンの前に立ち大きく手を広げた。

「な、何やってるんですか!？」

「大丈夫。あの子は……敵じゃないわ」

敵じゃない？

訳が分からずに呆然と立ち尽くす。そんな私を庇ったまま、マリベルさんは目の前のドラゴンに向かって言ったのである。

「さあ、元の姿に戻ってご挨拶なさい!! 梨乃さんは、わたくしの家族になる方。無礼な振る舞いは許しませんよ!!」

第21話 天使と悪魔は紙一重

「ほら、そんな拗ねたお顔をしないで、可愛いベル。しっかりと挨拶できるでしょう?」

「……………」

「ベル……梨乃さんはラグナのお嫁さんになる方なのよ。喜ばしい事なのに、どうして——」

「あたしは認めておりませんわ」

ひとまず市場より移動した私達は、こちらの方が近いこともあって我が家へとやって来ていた。

リビングに渦巻くのは、気まずい空気。自分の家だというのに、心が休まらない。

私の向かいには、マリベルさんが座っている。そしてその隣には、精巧なビスクドールを思わせる愛らしい少女の姿。綿菓子のようにフワフワとした金髪、白磁のような白い肌、緑色の大きな瞳は長い睫毛に縁取られている。

どこからどう見ても、立派な美少女だ。思わず感嘆のため息が漏れる。

——この可憐な少女が、つい先程までドラゴンに変身していたなど、誰が信じられよう。

「ベル……そんな事を言っではいけません。ラグナに怒られてしまっ
うわよ?」

「だっておばさま、この人は——」

「ベル。きちんとご挨拶をなさい」

マリベルさんが、有無を言わせない口調で少女をたしなめた。途端に少女は黙り込み、嫌悪感溢れる瞳を私に向けた。

「どうやら私は、この子に良い印象を持たれてはいない。というか、嫌われているんだろう。理由は何となく分かる。彼女もラグナが好きなのだ、きっと。」

しばしの沈黙が流れる。うう、この空気は苦手だ。

なんとか場を取り繕おうとして、私は笑顔で声をかける。

「えーっと……ベルちゃん、でいいのかな？ 梨乃といいます。はじめまして」

「あたしは子供じゃありません。呼び捨てで結構です」

小さく頭を下げると、思い切り睨まれた。

私よりも年下のはずなのに、この凄みはなんだろう。百戦錬磨の傭兵か、いや、猛獣にも似た迫力だ。思わず笑顔が固まってしまった。

少女——ベルは鼻を鳴らすと、嫌々な雰囲気隠そうともせず私から視線を外した。

「ベルベロツサ・クォーサーと申します。どうぞ、お見知りおきを」

「はあ。ベルったら、本当に困ったさんね。梨乃さん、気を悪くなさらないでね」

「いや、大丈夫ですけど……マリベルさんとは、どういったご関係で？」

「わたくしの妹の子供ですの。ラグナとは従兄妹にあたります」

「へー……」

ラグナの従兄妹か。しかし彼は養子であるから、血の繋がりは無

いのだろう。そんな事を考えながらベルを眺めると、彼女は私の視線に気付き、真正面から睨んできた。そして席から立つと、細い指をこちらに突きつける。

「やっぱり認められません！！ この人は、ラグナ兄様のお嫁さんには相応しくない！！」

きっぱりと言われて、私は言葉を詰まらせた。

マリベルさんを見ると、彼女も困り果てたように眉を顰めている。子供相手に反論なんて、大人気ないと思う。しかし、私がラグに相応しくないという、その理由をぜひ聞かせて欲しい。私はベルの厳しい視線を真っ向から受けながら、ゆっくりと息を吐いた。そして口を開いたその瞬間、

「もしやと思っていましたが……市場での騒動は、やはり君の仕業だったようですね、ベルベロツサ」

呆れたようなラグの声に、私の言葉は遮られた。

「ラグナ兄様っ！！」

そう言ってラグに駆け寄るベルの姿は、本当に愛らしい。豪華な金髪をふんわり揺らして、華奢な腕を目一杯広げて彼に抱きつく。

先程まで猛獣オーラを漂わせていたとは到底思えない。ラグに対

してだと、声色も違う。こんなにも態度の使い分けができるとは、恐ろしい少女だ。

キアラ違うだろ！？ と突っ込んでやりたいところだが、ラグを見る瞳があまりにも嬉しそうだったので、私は言葉を飲み込んだ。やっぱり彼女は子供なのだ。少しでも張り合おうと思った私が馬鹿だった。

「お元気そうで何よりですが……来るのが随分早いですね」

「一刻も早く兄様にお会いしたくて。だからドラゴンに変身して飛んできたの」

「凄いでしょ、と胸を張るベルに、ラグも穏やかな笑みを見せる。

「しかしドラゴンにまで変身できるとは、また腕を上げましたね」

「はい。兄様に誉めていただきたくて頑張ったの！！」

「凄いですね。流石はワラワヘムの最年少魔術師です」

「うふふ」

ベルは恥ずかしそうにはにかみながら、頬を薔薇色に染めている。その様子がとてもなく可愛くて、微笑ましい気持ちになった。天使だ。ここに天使がいるぞ……！！

「ねえ、兄様。頑張ったご褒美にキスをしてください」

チラ、と私の顔を窺って、一瞬だけ意地の悪い笑みを浮かべる天使。

……訂正させてもらう。やっぱりあの子は天使じゃないな。天使の皮を被った小悪魔だ。

笑顔の裏で苛立ちを募らせる私を横目に、ベルはひたすらキスを

せがんでいる。しかしラグは、健気な従妹の頭を優しく撫でると、苦笑いを浮かべて言った。

「君はもう十四歳でしょう。立派な淑女なのですから、簡単に唇を許してはいけません」

「ラグナ兄様……あたしはずっと兄様だけを想っていますのよ？ 少しくらい……」

「気持ちには嬉しいですが、私にはもう婚約者がおりますから」

ラグはそう言うのと、やんわりとベルの身体を離し、私の元へとやって来た。

それから、ただいま、と言いながら頬に口付けを落とす。

おいおい。このタイミングでキスをするのか。悪魔が激怒しますよ。思い切り睨まれてますよ……！？

「この様子だと、私が紹介しなくてもよさそうですね」

「ラグの従妹だって聞いたけど……もしかして、朝言ってた『紹介したい人』って……」

「ええ、彼女のことです。私の婚約者に、どうしても会いたいと言っていたのですよ」

ラグは頷くと、私だけに聞こえるような小さな声で付け足した。

「ただ、彼女少し気が強いでしょう？ 梨乃に会わせる時は、私が注意を払っておこうと思っていたのですが……何事ありませんでした？」

「いやあ、まあ、何事もなかったと思うよ……」

ドラゴンに襲われかけたり、相応しくない宣言をされたりもしたけど。

何事もなかった。うん、そういう事にしておこう。

「悪い子ではないので、仲良くしてやってください」
「ははは、仲良くね。頑張ってみるよ」

多分、当分の間は無理そうだけど。

私はベルの鋭い視線に晒されながら、力なく答えるのだった。

第22話 気持ち、見つめて。(前書き)

若干R15注意。

第22話 気持ち、見つめて。

ワラワヘムの最年少魔術師。それが、ベルベロッサ・クォーサーの肩書きだ。

幼い頃に魔術の才能を見出されたベルは、魔法大国としてファルスと肩を並べる『バルン国』の魔術師の下で修練を積み、若干十四歳にしてワラワヘムに認められこの地へ来た。

ラグの実家——つまりラグリーズ家は、一族との交流が深いらしく、ベルとも何度か顔を合わせていたらしい。彼女はラグによく懐いていたという。それは徐々に憧れへと変わり、やがて恋慕にも似た感情となったのだろう。

「今のうちだけですよ。あの年頃の少女は、年上の男性に憧れを抱くものでしょう?」

そう言いながら、ラグは手元にある野菜の皮を器用に剥いてゆく。流れるような動作に目を奪われながら、私はぼんやりと答えた。

「まあね。それは分かるけど……」

ベルは今、マリベルさんに連れられて市場へと出向いている。騒動のお詫びをする為らしい。

彼女への歓迎の意も込めて、今日は我が家で夕食をとってもらう事にした。勿論、マリベルさんも一緒だ。アルバートさんは少し仕事で遅くなるらしく、まだ帰ってきていない。

現在、私達は二人並んで夕食の準備中である。

「ずっと憧れていたお兄ちゃんにいきなり婚約者ができた、なんて、やっぱり簡単には認められないのかな？」

私には兄がいるが、たとえ彼女が何人代わるうとも気にした事なんてなかった。もとより、兄に憧れを抱いたことも無い。家族としては大切に思っていたが、兄が結婚するとなれば喜んで祝福するだろう。

ベルは、憧れ以上の感情をラグに対して抱いている。言い切っても構わない。女の勘ってやつが、鋭く働くのだ。ラグは気付いているのだろうか？ その気持ちを知らながらはぐらかしているのか、それとも、本当に気付いていないだけか……。

横目でラグの顔を窺うが、飄々とした様子は一切の情報を私に与えない。相変わらず、気持ちの探り合いに関してラグは上手だ。私の心はすぐに読み取るくせに。

少し悔しくなって、ふいと顔を逸らす。遅れて、ラグの微かな笑い声が聞こえた。

「どうしました、変な顔して。手が止まっていますよ」

「……意外と優しい『兄様』してたんだなー、と思つて」

「おや、ヤキモチですか？」

「ち、違つ……！！」

そりゃあ、多少のモヤモヤはあるけれど、子供相手にヤキモチを焼くなんて……。いや、正直に言つと、少し——本当に少しあるけど。ラグがベルに見せる優しさが、『優しい従兄』としてのものだとしても、やっぱり面白いものではない。

私って、独占欲が強かつたんだな。思い知らされて、情けなくなる。子供なのは私も同じか……。

相応しくない——。ベルの言葉が脳裏に浮かんで、チクリと胸が痛んだ。

彼女がどんな意味を込めてその台詞を言ったのかは分からない。でも、確かに今の私はそう言われても仕方が無いのかもしれない。つまらない事で嫉妬して、大人になりきれない。ラグへの気持ちが大きすぎて、周囲に対して余裕を持てなくなる。

……こんなんじゃないよね。

彼の婚約者だと、胸を張って言えるような女性になりたい。ラグの為に、自分の為に。

ひっそりため息をつく私に、ラグの優しい笑みが向けられる。どこまでも澄んだ、青い海のような瞳。ドロドロとした気持ちを透かされたくなくて、つい俯いてしまう。

「もしかして、ベルベロッサに何か言われました？」

「え？ そんなこと、ない——」

慌てて顔を上げると同時に、ラグの唇で言葉を塞がれる。

手に持っていたペリネの袋が落ちて、中身が散らばる音がした。

ああ、拾わなくちゃ……。なんて思いつつも、私の指は彼に絡め取られ、されるがままキスを受け入れている。舌で歯列をなぞられ、脳天が甘い痺れに侵される。呼吸ごと全て奪われているのに、彼を離せない。

「んう……ラグ、駄目。みんな、帰ってくるよ……」

大きな手が、背中を滑り腰を撫でる。それだけなのに、思わず身体が反応してしまう。首筋に唇を寄せられ、強く吸われた。ダメ、痕が残ってしまう。言いたいのに、私の喉は震えるばかり。

そのうちに、ラグの手は僅かに膨らんだ双丘へとさしかかり、

「……これ以上は、歯止めがきかなくなりますね」

そう言つと、頬に軽いキスを降らせて、身を引いた。

半端に身体を火照らせた私は、ずるずるとその場に座り込み、力無く彼を睨む。

……ラグの馬鹿。腰が砕けちゃったよ。

「早く料理を作りましょう。さあ梨乃、いつまでも休んでないで」
「一体誰のせいだと……！！」

未だ立てぬままの私に視線を合わせるように、ラグが膝をつく。

それから蕩けそうな笑顔を見せると、そっと手を差し出して言った。

「今の私はこんなにも幸せだったことを、ベルベロッサに伝えましょう」

「ラグ……」

「私の幸せは、貴女が側にいることなのですから。あの子もきっと分かってくれます」

「うん」

彼の手を取つて、私は頷く。

そうだ、こんなことで道を見失っていたらいけない。私達は共にあるからこそ幸せなんだ。

お互いを信じていれば、どんな障害だって乗り越えられる。握った手の温もりを感じながら、私はラグへの想いを再確認するのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2318p/>

お嫁にいきますっ！！

2010年12月16日16時43分発行